

三島村黒島
大里遺跡 2

平成 29 年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査に係る
大里遺跡第 2 次発掘調査



中園 聡 編

2021 年 3 月

三 島 村

鹿児島国際大学考古学研究室（中園聡研究室）

序 文

私たちの三島村では、三島村・鬼界カルデラジオパークとして平成27年度に日本ジオパークネットワークの正会員に認定され、活動に力を入れてまいりました。活動内容は多岐にわたっておりますが、このほど出版される運びとなりました本書も、「平成29年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査」の一環として実施した調査成果が収録されたものです。

調査と整理事業にあたっては、三島村との連携協定に基づき協力関係にある鹿児島国際大学において実施していただきました。調査には新しい技術を導入するとともに、ジオパーク関連事業にふさわしい歴史・文化・自然、そして活用を含む多角的視点から取り組んでいただいたとうかがっています。今回の一連の作業に当たられた同大学の中園聡教授をはじめ、研究室のスタッフ、学生各位、さらに地元黒島の協力者各位に、ここに深甚の謝意を表したいと思います。

本書は、歴史的事実を解き明かす貴重な資料となるとともに、そのデータには私たちの未来を考えるための手がかりも多く含まれているものと考えます。この報告書がジオパーク活動等に広く活用されることを願います。

三 島 村 長
三島村ジオパーク推進連絡協議会会長 大山辰夫

例言

1. 本書は、平成29年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査として実施した、鹿児島県鹿児島郡三島村黒島に所在する大里遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、三島村と鹿児島国際大学の連携協力に関する包括協定に基づき、鹿児島国際大学教授 中園聡を調査主体として、同大学考古学研究室（中園聡研究室）の学生等の協力を得て実施した。
3. 調査資料の整理および報告書作成作業は、主として鹿児島国際大学考古学実験室内で実施した。整理作業は、中園およびその指導により同研究室所属の研究員・大学院生・学部生等が実施した。
4. 図中の方位記号は座標北である。
5. 図中で使用した座標は、平面直角座標第1系座標に基づく。
6. 遺構・遺物の計測値は、原則として遺構をcm、遺物をmm単位で記述した。規模や精度によってはその限りではない。
7. 遺物は地点・トレンチ等にかかわらず、本書では通し番号を付している。
8. 遺物の色調は、『新版標準色帖』（日本色研事業株式会社）、『新彩色辞典 カラーデータ集』（誠文堂新光社）を使用した。
9. 挿図の縮尺は図ごとに示している。
10. 放射性炭素年代測定は、株式会社地球科学研究所を通じてBeta Analytic社で実施された。
11. 測量・遺構計測にあたっては、記録の効率化と正確化、将来の幅広い活用等にかんがみSM-MVSを中心とする三次元記録を用いた。整理作業において遺物の一部にも使用し、いずれも本書に反映させた。
12. 本書は、デジタル入稿された。トレース図は全てデジタルトレースである。
13. 本書の編集は三島村定住促進課の協力のもと、中園聡が担当した。執筆は中園、平川ひろみ、太郎良真紀、下小牧潤が共同で行った。うち、主として下小牧が中国系瓦を担当し、ほかの部分は3名による共同執筆である。

目次

序文		滑石製品	36
例言		陶鍾	36
第1章 調査の経緯と経過	1	近世以降の遺物	37
第1節 大里遺跡をめぐる環境と経緯	1	土器・陶磁器	37
第2節 調査体制	6	縄文時代の石器	41
第3節 調査経過の概要	6	古銭	41
第2章 調査の記録	7	近代以降の遺物	43
第1節 調査地点と調査区	7	第2項 第3地点の調査	45
第2節 調査の成果	9	第3地点1トレンチ（上段の畑）	45
第1項 第2地点・1トレンチの調査	9	第3地点2トレンチ（下段の畑）	45
第2地点1トレンチの遺物	20	第3地点・2トレンチの遺物	48
古代・中世の遺物	20	第3章 調査の成果と課題	54
白磁	20	第1節 成果と課題	55
青磁	22	第2節 普及・教育	55
青花	25	あとがき	57
中国陶器	26	付録1	58
朝鮮系陶器	28	付録2	58
中国系瓦	29	付録3	59
列島産古代・中世の土器・陶器	32	報告書抄録	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 大里遺跡をめぐる環境と経緯

大里遺跡は、鹿児島県鹿児島郡三島村黒島に所在する。三島村は、黒島、硫黄島、竹島の主要3島からなり、薩摩半島と相互に視認できる「本土」に最も近い離島村といえる。沖縄県に続く南西諸島の入口ともいえるべき最北端に位置し、鬼界カルデラやそれに関連するユニークな地質環境や自然などはもとより、歴史的にも文化的にも興味深い地域である。

本遺跡の第1次調査の内容や黒島の地理的・歴史的環境、遺跡の分布状況、これまでの調査活動等については、調査報告書¹に詳しいので、それを参照いただきたい。

大里遺跡は、中世の中国系瓦が出土し、貿易陶磁器類など中世前期を中心とする遺物が多く出土する注目すべき内容をもっている。鹿児島国際大学考古学研究室（中国聡研究室）では黒島をはじめとする三島村の各島において、考古学的問題関心はもとより、文化財や歴史・民俗・自然に関する様々な資源を見出し評価することなどを通じて地域の活性化に役立てるパブリック考古学的な取り組みを、平成21年から進めてきた。その際、大里小中学校（現・三島大里学園）保管の考古資料や個人採集資料などのクリーニング、実測・3次元計測などの資料化、展示・保管ケースの作成や解説パンフレットの作成などを実施した。平成23年度からは発掘調査や遺跡の分布調査を行い正確な埋蔵文化財の状況を把握するとともに、将来にわたる文化財保護等に資す必要等にかんがみ、三島村が主体となった「村内遺跡発掘調査等事業」が実施された。その際、同村における調査実績や同村との協定関係にあり協力が得られることなどを考慮のうえ、鹿児島国際大学の中国を調査担当者として黒島全域で調査を遂行したが、本遺跡については平成23年～24・26年に分布調査を行った。その一環として、平成26年には発掘調査を実施した（第1次調査）。

この第1次調査では、現在の三島集落の中心部といえる旧庄屋宅、通称「庄屋どんの屋敷」の一角にある畑にトレンチ（1トレンチ）を設定した。また、その南隣に

ある伽藍大神の境内の隅にも小トレンチ（2トレンチ）を設定した。2つのトレンチは近接するが、出土遺物の中心となる年代は概ね11世紀代から12世紀、あるいはせいぜい13世紀にかけての中世でも比較的古い段階のものであった。また、一部古代末に遡る可能性のある資料が見られるほか、中世後期にかけての遺物も少なからず出土するなど、近世から現代に至る遺物があることから、中世から連続と集落が営まれたと考えられる。

1トレンチは宅地内のため、後世の客土や後世の大きな土坑多数が中世の層に切り込んでおり、地山と下層の中世初期の層を除きプライマリーな層がほとんど遺存していなかった。中世初期の層は狭い範囲しか調査が行えなかったが、中国系瓦と白磁・青磁・中国陶器など、中国産陶磁器類が多数出土したことに加え、建物の柱穴とみられる遺構も1つ検出されるなどの大きな成果があった。2トレンチは擾乱はなく、中世初期以降の層序と出土遺物の年代がほぼ対応した形で検出された。やはり中国系瓦や中国産陶磁器類の出土が際立っていた。両トレンチや周辺の分布調査から、中国系瓦の鴟吻や軒瓦が揃っておりその種類と数が豊富であること（国産とみられる瓦は近世または近現代のものを除き一切見当たらない）や、高麗無袖陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、南島系の滑石混泥土器が存在することが注目された。また博多とその周辺では中国系瓦が出土する遺跡のパターンのうち最も明確であるのが宗教施設関連であり、本遺跡でも神社とその周辺に稠密であったことから、瓦葺の宗教施設が存在した可能性などが考えられた。ところが、調査面積が極めて狭いうえ整地・掘削の実態、遺構の性格や広がり、ひいては本遺跡の性格と実態を明らかにするといった、遺跡の解明に至るにはほど遠い状態であったのである。

なお、鹿児島国際大学で実施した蛍光X線分析によって、本遺跡の中国系瓦の胎土は博多遺跡群などと一致しており、鹿児島県西部の芝原・渡畑遺跡とも一致するだけでなく、さらに中国浙江省寧波市内のものとも一致することが判明している。村内では中国系瓦が確認されている遺跡が複数あるが、これらは博多遺跡群とその周辺のほか、薩摩半島西部に至る九州西海岸部でわずかに確認されている中国系瓦の分布域の南端にあたる。

以上のように、中国側と日本側の主要な国際貿易港である寧波と博多との密接な関係が想定でき、さらに南西

¹ 『黒島平家城遺跡・大里遺跡ほか一村内遺跡発掘調査等事業報告書1』三島村埋蔵文化財調査報告書第1集 三島村教育委員会、2015年。



図1 東アジアにおける三島村と黒島の位置 (1/1,000万)

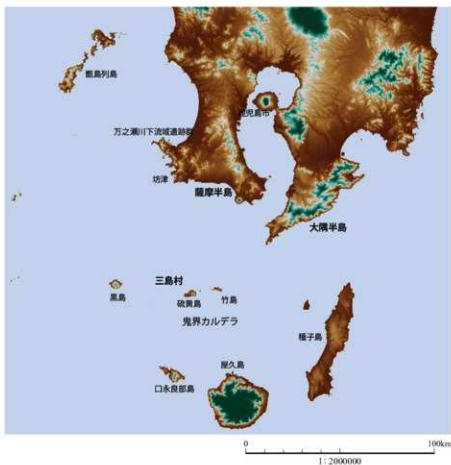


図2 南九州における三島村と黒島の位置 (1/200万)
 下図は国土地理院基礎地図情報数値モデル (DEM108) より作成。

諸島、朝鮮半島などとも関係が深いのが本遺跡や三島村の中世であり、「日宋貿易」の脈絡を無視することはできない。すなわち、日本にとどまらず東アジア的な環境で考えるべき地域なのである (図1)。

さらに、本遺跡及び島内では、縄文時代後期を中心とする縄文土器や、磨製石斧、磨石・蔽石等が発見されているがその包含層が明らかでないこと、隣の硫黄島・竹島の海底に鬼界カルデラがあり約7,300年前の巨大噴火がどのような影響を与えたか、どのように植生が回復したかなど、具体的に解明すべき事柄が多く残されている。

黒島では旧石器や縄文時代のごく古い段階の遺跡がみられないが、黒島では鬼界カルデラの噴火より古い縄文時代草創期の丸ノミ形石斧や、縄文時代早期に遡るとみられる塞ノ神式土器の破片が採集されており、該期の自然環境と島嶼利用のあり方を考えるうえで一石を投じるものとして興味深い。また、黒島では縄文時代後期になると考古資料が多くみられるようになるが、貝塚を形成した痕跡は未発見であり定着的な集落が存在したのか、それとも漁撈などの活動による一時的な利用を繰り返したのかなど、島嶼利用のあり方を検

討する上でも手がかりが得られる可能性があると考えている。

加えてこれまでの調査では、縄文時代晩期を最後に、弥生時代から古代に至る長期間の資料が未発見であり、平安時代の途中から再びこの島で人の生活の痕跡が見られるようになるまでは、ほぼ無人であった可能性が考えられる。このことは、九州から沖縄諸島に至る、よりマクロな地域におけるエスニック・アイデンティティ (民族集団の帰属意識) あるいはエスニック・バウンダリー (民族的な境界) の形成やその変容などを含む、意識、経済や政治などに関して生じた現象であった可能性を我々は考えている。

以上のように中世を中心とする本遺跡の実態解明は、歴史的・文化史的な重要性はもとより、遺跡を取り巻く自然環境や景観と人の関わりという面からも重要ということができ、それらを意識して調査した。また、一般に文献史料が多く残っている中世においても、黒島はもとより三島村に関する文献は僅少であり、近世に至っても信頼性の高い在地史料は限定的であるため、住民にとっても過去の理解は推測によらざるを得ない点が多

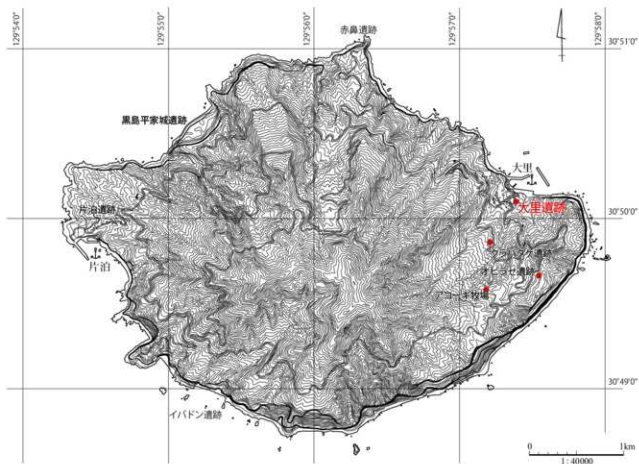


図3 大里遺跡の位置 (1/40,000)

遺跡は黒島東部の大里集落にある。下図は国土地理院基盤地図情報 462917・462927より作成。

い。そのような現状を打破するためには物質的遺存物を証拠とする考古学的調査に期待がかけられるが、調査は緒についたばかりであり未解明の部分が多い。現状下では人口減少、高齢化が顕著であり、様々な行政的取り組みはあるものの根本的な解決に至るには困難な道のりが予想される。そうした諸般の状況にかんがみ、黒島の歴史を解明してその理解を通じた住民の誇りの醸成とアイデンティティの再構築など急務の課題がある。それを実現するためには中世やそれに先立つ古い時代だけでなく、それ以降、現代に至る「新しい過去」についても、可能な限り情報を得ることが望まれ、それも今回の調査で十分考慮すべき事柄とした。

こうして、学術的課題だけでなく、これまでのパブリック考古学的活動を通じた地域住民の理解と、調査への熱烈な要望、行政の判断などが相まって、今回の調査が計画されるに至ったのである。

今回の調査は、前述のように大里遺跡の実態解明を主目的とする学術研究として調査を実施したものである。文化財保護法（昭和25年法律第214号）第92条第1項の規定に係る届出手続きを経て発掘調査を実施した。実

施に当たり、三島村のジオパーク関連事業（「平成29年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査」）の一環として、調査関連費用は三島村が負担し、同村と連携協定を結んでいる鹿児島国際大学において調査及び整理作業等を実施（中園聡研究室）、大学事務局において委任経理の実務を行った。調査に当たっては、同ジオパーク関連事業として、考古学をはじめとする学術研究はもとより地域活性化等のデータ・資源等に広く資するよう配慮しつつ、調査を実施した。

調査では、大里遺跡内の2つの地点、すなわち遺跡北端とみられる畑（字北下村3番地）と、遺跡の中心に近いとみられる宅地内（字下村35番地）にトレンチを設定した。なお調査においては、遺跡から格段の高精細かつ正確な情報を回収し保存することと、上述のような様々な活用への拡張性をもち将来的に展開可能な方法をとることを考慮して、記録は写真等の従来だけでなく、三次元計測（SIM-MVS、簡易LIDAR）等の技術を駆使することとした。

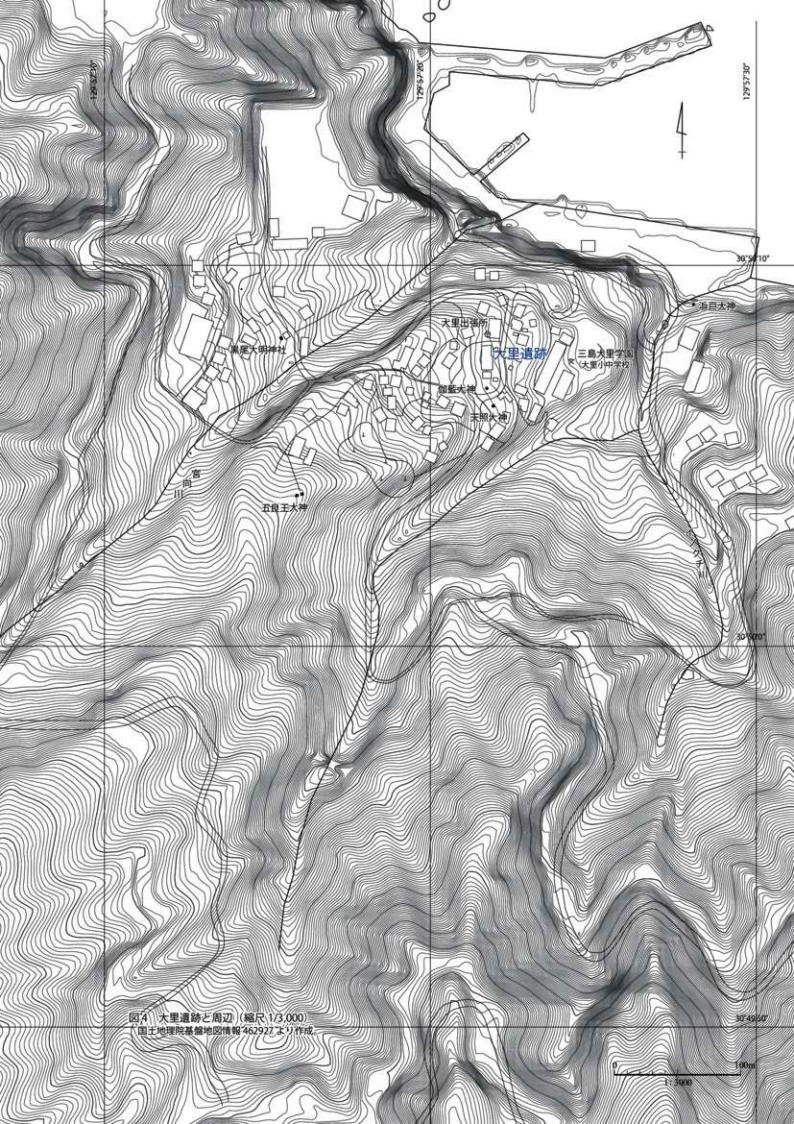
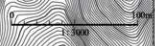


图4 大里遺跡と周辺 (縮尺1/3,000)
国土地理院基礎地図情報462927より作成



第2節 調査体制

調査にあたっては、鹿児島国際大学考古学研究室（中国聡研究室）を中心として以下の体制で実施した。

調査主体者：鹿児島国際大学 教授 中国 聡

調査担当者： 同

調査員：鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程 平川ひろみ、太郎良真妃、同博士前期課程 下小牧調、若松花帆、野崎杏菜、国際文化学部生 石原茉奈、川島祐佳、遠矢大士、長濱千尋

同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター研究員 川宿田好見（調査指導）

調査協力：三島村定住促進課、三島村教育委員会、三島村役場大里出張所、その他、鹿児島国際大学大学院博士後期課程 楊帆をはじめ卒業生・修了生の調査協力を得た。

本事業の遂行にあたっては、鹿児島国際大学当局の理解と援助があった。とくに経理等の実務については、鹿児島国際大学産学官地域連携センターにお世話になった。

第3節 調査経過の概要

平成29年9月に実施した発掘調査の日程は、以下のとおりである。

- 9月2日 朝、鹿児島港より「フェリーみしま」に乗船、午後大里港入港、下船。夕刻にかけて機材搬入。地元関係者へ挨拶、翌日からの調査準備。
- 9月3日 発掘調査準備の後、調査地点の伐開作業・清掃を開始。
- 9月4日～13日 発掘調査を実施（測量・掘削等）。
- 9月14日 発掘調査及び台風接近のため現場保護作業。
- 9月15日 現場保護作業。
- 9月16日 現場保護作業及び、一部調査と地形測量を実施。
- 9月17日 台風直撃のため避難。出土品整理、避難者からの聞き取り。夕刻より現場を確認し完好な保存状態であったことを確認。調査再開（周辺の片づけ）。
- 9月18日～27日 発掘調査を実施。22日大里中学校1年生、25日同2年生が見学と発掘

体験に来訪。

- 9月28日 発掘調査及び、発掘現場保護作業、撤収作業。大里中学校1・3年生が見学と発掘体験に来訪。
- 9月29日 発掘現場保護作業と撤収作業を継続。「フェリーみしま」に乗船、午後大里港出港、夜鹿児島港入港。調査機材、遺物等を運搬、大学帰着。

なお、現地説明会については、台風の直撃や悪天候のため調査期間が限定されたことに加え、地元等からの強い要望もあり、鹿児島県教育委員会文化財課に相談のうえ、11月に現地説明会と埋め戻し作業等を実施することにした。その間トレンチは厳重に養生のうえ保全することとなった。

- 11月17日 「フェリーみしま」に乗船、午後大里港入港、下船。作業準備。
- 11月18日 埋め戻し準備、現地説明会・展示の準備。
- 11月19日 11:00～12:00 現地説明会を実施（大里・片泊両地区の住民40人が参加）。一部資料の展示。
- 11月20日 朝、大里小中学校の全校集会で本遺跡および同校保管資料等に関する講演と展示解説を実施。周辺の写真撮影、補足測量。
- 11月21日 現場埋め戻し作業および周辺の補足測量。
- 11月22日 雨のため室内作業。
- 11月23日 現場埋め戻し作業および周辺の補足測量。道具類等を梱包。
- 11月24日 午前、埋め戻しを完了し原状に復した現場の写真撮影。「フェリーみしま」に乗船、午後大里港出港、夜鹿児島港入港。道具類等を運搬、大学帰着。

その後、鹿児島国際大学の考古学実験室において、報告書の作成に向けて出土遺物・記録類の整理作業を実施した。また、調査時のデータの三次元解析や遺物の三次元記録なども行った。なお、調査時の三次元記録の方法など一部については学会等でも公表するなどしたが、反響は大きく、三次元計測の利用の推進にも寄与できたと考える。

第2章 調査の記録

第1節 調査地点と調査区

本遺跡は、黒島東部に所在する大里地区の集落内にある(図3~5)。大里集落は、平地がほとんどない黒島の中でも比較的傾斜の緩やかな土地に形成されているが、本遺跡はその中心部とほぼ重なっている。今回の調査に先立ち平成26年の発掘調査(第1次調査)で2つのトレンチを設定した地点を「第1地点」とし、今回調査した2つの地点のうち、第1地点に近い宅地内のほうを「第2地点」、遺跡の北端に位置する畑を「第3地点」として区別することにした(図5)。

第2地点に設定したトレンチは、第1地点1トレンチの北東約40mである。第1地点とは、道路を挟んで斜向かいにあたる。第1地点では中国系瓦が多く出土したが、以前の分布調査で第2地点でも僅かながら同種の瓦を採集しており、また宅地内の一部を地下げた際に滑石製石鍋などの遺物が出土していることが聞き取りから確認されていた。なお、第1地点が旧庄屋宅「庄屋どんの屋敷」(1トレンチ)とそれに隣接する伽藍大神境内(2トレンチ)であるのに対し、第2地点は「政所」と呼称されてきた屋敷地内にある。

敷地内の家屋の東側には蜜柑などの果樹や有用植物が植えられ、その間には小さな畑もある、地元で「ソノ」と呼ばれる屋敷地の平坦面があり、一段下がって大里小中学校(令和2年度より三島村立三島大里学園)が隣接している。その屋敷地の平坦面(標高44.7m前後)に、東西に長く、すなわち家屋から学校方向に長いトレンチを設定した。これを「第2地点1トレンチ」とする。

トレンチ設定箇所は、蜜柑等の低い植樹やプッシュ等によって見通しがきかないため、全景写真も撮りづらいという状況であった(図7・8)。そこで、地上の低位置から簡易LiDARによるレーザー計測を試み(図9)、またSIM-MVSにより多数の地上写真をコンピュータ解析して精密な三次元モデルを生成することで、地形の把握と歪みのない画像を得るのに役立てた(図6・13・14)。低い位置からの撮影でも必要な精度と精細さが得られることを確認したうえで、調査ではSIM-MVSを多用することとした。

現在の大里集落内の宅地では、土留の石垣による擁壁を構築しながら、切土・盛土によって斜面地にテラスが

造成されているようであるが、造成自体の始まりは中世に遡る可能性も考えられたため、土層の確認が重要とみられた。そのため、2.0m幅で長さ8.0mの東西に長いトレンチを設定しようとしたが、蜜柑の木を避けるため、8.0mのうち西側3.5mは幅2.0mを確保し、東側(学校側)4.5mは幅1.0mに狭めた。面積は11.5m²である。なお、調査時は便宜的に西側(高い側)から2mごとに1~4区と呼んだ。

第3地点は、第2地点から直線距離で略北(海側)へ約30mにある畑地で、本遺跡の北端とみられる位置にあたる(図5・48)。以前の分布調査で、しばしば縄文時代後期や中世の遺物を採集した地点である。道路を挟んで大里小中学校(現・三島大里学園)の校門があるが、この校門脇の法面はかつて包含層が露出しており、生徒によって遺物が採集されていたという。筆者らもこの第3地点では中国産貿易陶磁器、須恵器、土師器、カムイヤキなどの遺物の分布を確認しており、土師器の裏なども見られるため生活址がある可能性が考えられるとともに、向かい側の校門脇からも中国系瓦を1点採集したことがあるため、中国系瓦に関連する建物の存在も一応考えられた。

地形が北西-南東方向に長い第3地点には、大小の階段状の造成が見られ、全体が畑として利用されている。大きくまとめると、畑は南西側の高い段と北東側(海側)の低い段の上下2段がある(図48)。上段の畑に北西-南東2.0m、北東-南西3.0m、面積6.0m²のトレンチ(1トレンチ)を設定した。また、上段の畑と下段の畑の間には比高差約2.7mの崖状の急な法面(以下「崖面」)または、たんに「カマ」と呼ばれる種類の、横穴状に掘り込まれたサツマイモ貯蔵穴が点在する。そのうち1つ(「2号ギシガマ」)の内部の壁面には土師器の椀と甕の一部が露出しており、遺物包含層である蓋然性が高いと判断されたことから、このギシガマの開口部に連続させる形で前面に小トレンチを設定するとともに、崖面の一部を清掃して上段と下段の間の土層の解釈に役立てることとした。下段の畑に設けたこの小トレンチ(2トレンチ)の規模は、北西-南東0.8m、北東-南西0.7mであり、ギシガマ壁面に見られる遺物包含層の露出部分の調査を含

1 「ギシ」は岸・土手、「ガマ(カマ)」は横穴・洞穴を意味する。

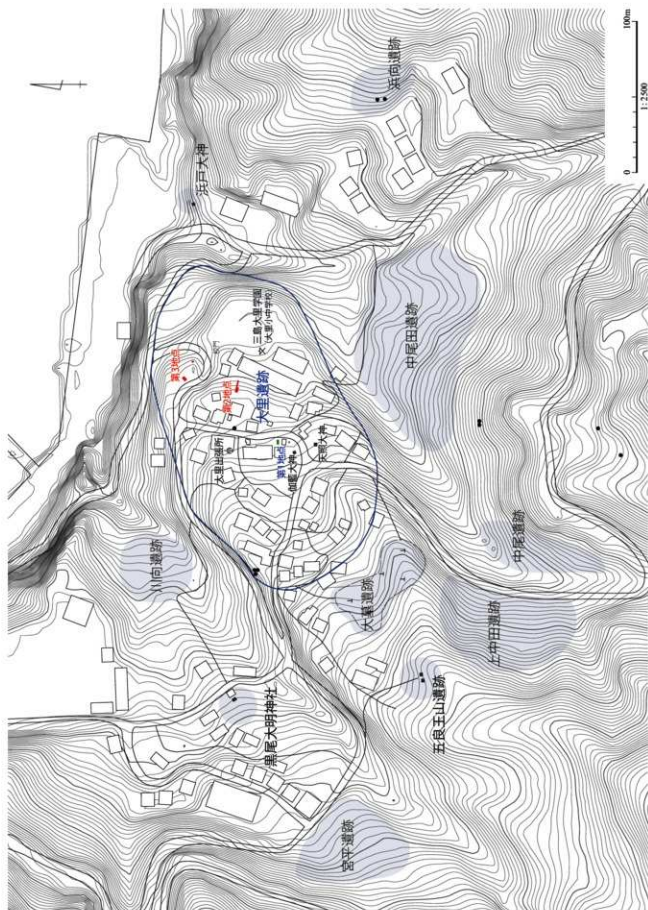


図5 調査区とトレンチの位置 (1/2,500)

■: 既調査地点 (第1地点) のトレンチ、●: 今回調査の地点とトレンチ、●: 石塔の分布。下図は国土地理院基盤情報 462927 より作成。

めて面積は0.6m²となる。

なお、調査中の住民からの聞き取りと古い航空写真の判読によって、下段の畑は古い道路の跡がほぼそのまま畑になったものであることがわかった。下段の畑は全体に北西-南東方向に細長く、ごく緩くカーブしながら学校の正門の正面に向かっている。地元で「新道」と呼称される現在の道路が掘削され開通したことで大里小中学校と第3地点の間が分断されたが、それ以前にあった無舗装の道路であり、地形の3次元計測結果でも一目瞭然である。生徒たちのかつての通学路がこの下段の畑ということになる。その道を「本門道」と呼んでいたとの話が聞かれた。また、ここに板並木があったとの話も複数得られた。

第2節 調査の成果

以下、各地点・トレンチの調査成果の概要について報告する。

これまでの調査から、地元で「アカツチ」や「カマツチ」と呼ばれる粘質土層（安山岩風化土か？）が本遺跡の基盤を形成するとみられる。それは今回調査した各地点・トレンチでも共通していた。現在のところその由来を明らかにしていないが、正確な同定・比較に備えて調査時にサンプルを採取している。同様に、他の層や遺構埋土についても可能な限りサンプルを採取するよう努めた。なお、土層の名称（層番号）はトレンチごとに付した個別的なものである。各層の年代や解釈については、今後の研究により変更される可能性が窺える。

今回の調査で出土した遺物は、コンテナボックス8箱分であった。

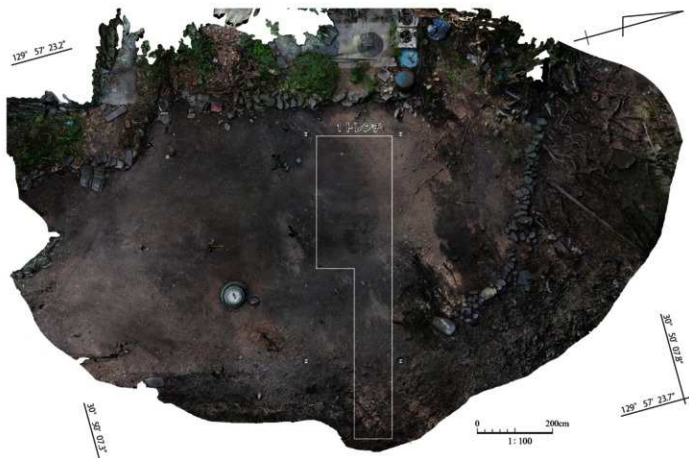


図6 第2地点調査区(1トレンチ)(1/100)
SIM-MVSによる3次元モデルを利用。

1 学校の正門の道を意味する。学校には裏門や、一部は第2地点調査区の北側斜面からアクセスする生徒もいたそうである。

第1項 第2地点・1トレンチの調査

第2地点に設けたトレンチは、1トレンチのみである(図6)。前述のとおり、本地点は蜜柑を主とする果樹等が密に生育しており上空からは地表面がほとんど見えない。そのため、果樹の下の低い位置から地表の写真撮影をし、第2地点内では約1,000枚の写真をもSfM-MVSで解析することにより、地形の詳細な三次元記録とした。なお、さらにその周囲の各所もできるだけ広く撮影し、地形の記録と把握に務めた。同様に、掘り下げや遺物の出土など調査の進行に応じて、トレンチ内部の状況をそれぞれ数百枚ずつ撮影・解析し、詳細な3Dモデルを生成することで記録に役立てた(図15~18)。

1トレンチは、略東側(学校側)に向かって下部の地形が傾斜しており、新しい盛土(2層)が分厚い可能性が考えられたため、トレンチ長8.0mのうち、西側3.5mと東端約1mのみ掘り下げることとした。その間の区間

1 掘り下げ前、掘り下げ中を数段階、終了時。また、記録・検討用を兼ねて遺物の出土状態なども3Dモデル用に撮影した。今後はさらに計画的かつ詳細に実施したい。



図7 第2地点1トレンチ設定前の状況(西から) 清掃前。以前から磨製石斧や石銅片などが発見されており、我々の調査でも瓦片を採集していた。

は2層の途中まで掘り下げを断念し、それ以下を保存することにした。

1トレンチの土層は次のとおりである(図19・20)。大別して記述すると以下のようになる。

- 1層：表土層。黒褐色を呈する。基本的には耕作土といつてよい。なお、一部に基盤層に由来するとみられる黄褐色粘質土がブロック状に入った部分があり、聞き取りと合わせると、それは近年の浄化槽工事の排土である可能性が考えられる。図19で明らかのように黄褐色ブロックの集中はトレンチ東寄りにあり、地表面がほぼ平坦な西側から東側の斜面に移行するやや盛り上がった部分に近い。また、このブロックの上面は地表と同様にやや盛り上がっているが、下は平坦から斜面に移行するように折れ曲がっている。この土手状の小さな盛り上がりとし斜面への移行は下の2層中でうかがえ、屋敷地の周囲にめぐる竹の根元に寄せられた土砂と考える。1層の遺物は近年のものを含む。
- 2層：基本的に造成による盛土層とみられ、客土から成っている。トレンチの全体にわたる。下面は3層と



図8 第2地点の全景と1トレンチ(西から俯瞰) 低い果樹などのため見えにくい。



図9 第2地点地形のレーザー計測(南から) 左は家屋がある平坦面、中はトレンチを設定したテラス面、右は落ち際。階段状に土地が形成されている。



図10 第2地点1トレンチ（西壁側から）
トレンチ下部の4層上面の状況。



図11 第2地点1トレンチ調査終了時（西壁側から）
トレンチ底面。4層除去後、5層上面検出状況。ピットがあるが（奥の大きめのは15号）、いずれも上の層からの掘り込みであり、この面で新たに検出されたものではない。



図12 第2地点1トレンチ埋め戻し完了状況（西側から）
原状に復した。

4層を切っている。基本的に暗褐色を呈するが、上述のものと同様に基盤層由来とみられる黄褐色粘質土のブロックが偏在する部分があることをはじめ、変異に富む。砂礫混じりの土壌中には人頭大の巨礫（安山岩）も含まれている。下部にはやや明るい層がある。これらの変異を含めてこれらはここではあえて細分せず、全体を1つの層としているが、一度に形成されたものとは言い難いと思われる。出土した人工物には中世や近世のものも少なからずあるが、ガラス、金属など近代から現代にかけての日常のものが含まれており、近代以降に人為的に形成された層と判断できる（図18）。なお、全体にあまり締まっておらず、空隙も多い。木質が付着した鉄釘なども多く検出されており、家屋の廃材などが腐朽したことが空隙の要因かもしれない。

3層：2層によって大きく切られており、トレンチの北壁と南壁の観察からは緩やかに東に傾くが、概ね水平とみることもでき、トレンチの最下部である基盤層の5層とほぼ並行する。砂混じりの粘質土層で、灰色みを帯びており、ややグライ化している。細分できるが、下部からは白磁や青磁のほか近世陶磁器等も出土しており、それより新しい遺物が混じっていないことから、少なくとも本層の下部は近世に形成されたものと考えられる。本層の由来は明確ではないが、水田層の可能性も否定できない。3層上部は北壁西端や西壁で黒褐色を呈しており、旧表土の可能性もある。すると、それに載る層は盛土とも考えられ、掘削を伴う2層は盛土から切り込まれた可能性も考えられる。ただし、現場からはそれ以上の確定的な解釈は難しかった。なお、3層中では西壁で5層に達する深いピットを検出したが、埋土は締まっておらず大

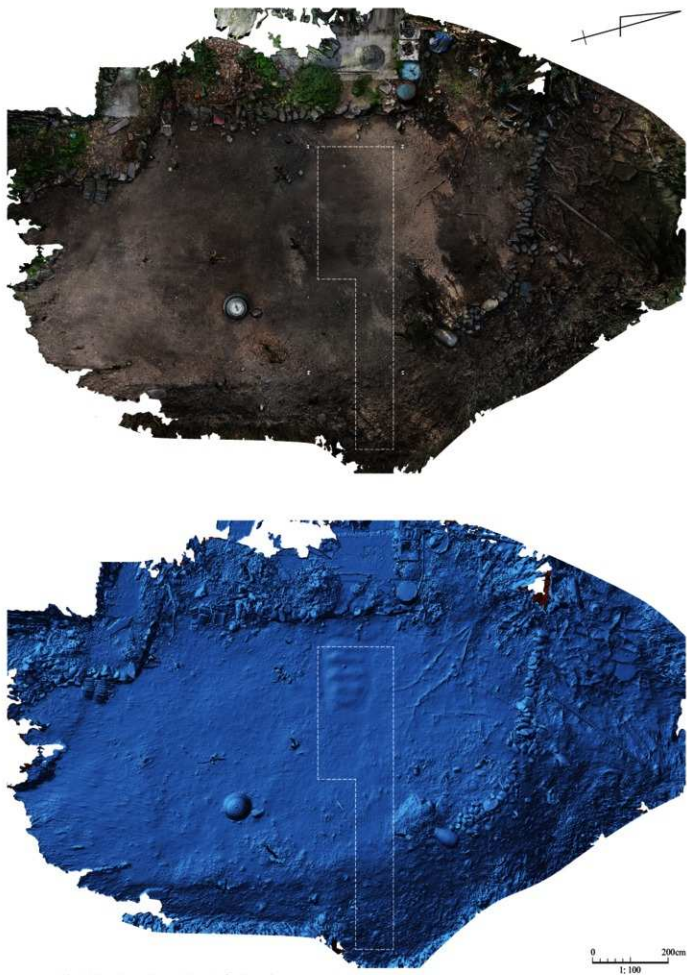


図13 第2地点調査区の地形の詳細記録① (1/100)

SIM-MVSによる三次元計測。樹木は非表示。上：テクスチャ付き、下：メッシュ表示。白い破線は1トレンチの位置。

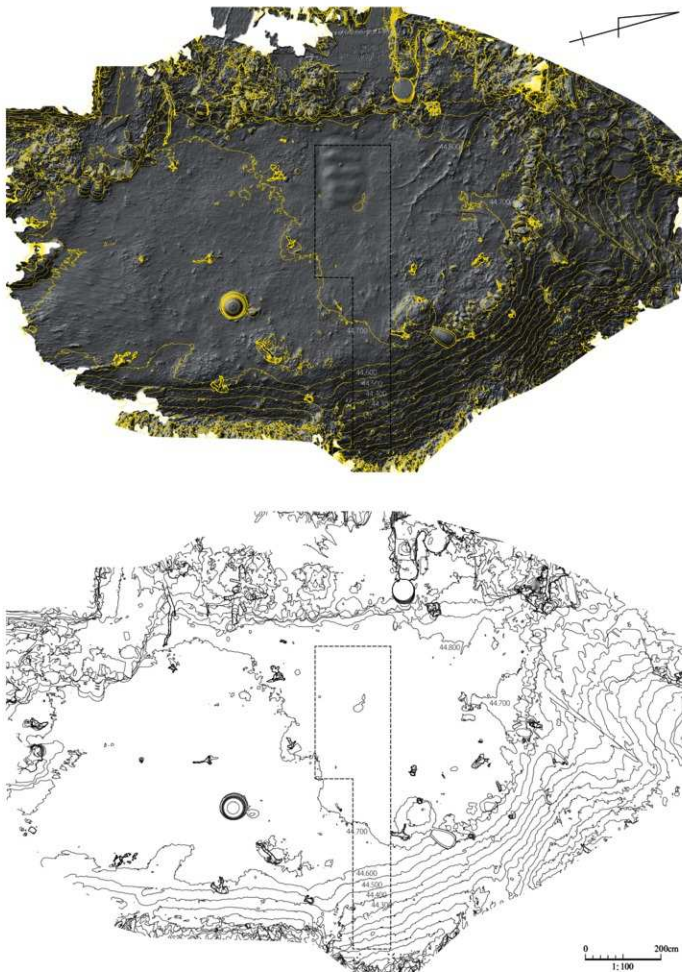


図14 第2地点調査区の地形の詳細記録② (1/100)

SIM-MVSによる三次元計測。上：三次元メッシュモデルに10cmコンターラインを重ねて表示、下：コンターラインのみ表示。

調査前



2層上面



2層



0 100cm
1:50

トレンチ内の数字はピット番号

4層



図15 第2地点1トレンチの主要な調査進行過程の三次元記録(南南西側から俯瞰オルソ画像)(1/50)

SfM-MVSによる三次元記録。上:清掃後(トレンチ設定前)。後のトレンチの概形を破線で付与した。2段目以降:調査の進行過程(抜粋)。

調査前



2層上面



2層

0 100cm
1:50

トレンチ内の数字はビット番号

4層



図16 第2地点1トレンチの主要な調査進行過程の三次元記録（真上からのオルソ画像）（1/50）
SfM-MVSによる三次元記録。図15と対応。

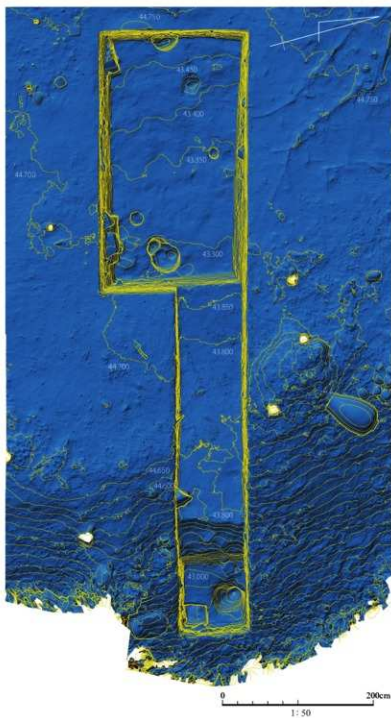


図17 第2地点1トレンチ計測図(1/50)
トレンチ底面(5層上面)の状況。コンターラインは5cm。

きな空隙が見られた。このピットは、近世染付の
小片が出土しているため古くともせいぜい近世と
みられ、近代まで下る可能性も十分ある。3層の
形成時期とは矛盾しない。

- 4層：トレンチ内の西側部分で確認された灰色みの強い
粘質土層。20～25cmほどの厚さである。上部は
赤みが強く硬いため、鉄分が集積している可能性
がある。下部は赤みを帯びているが上部ほどでは

なく、硬くない。なお、3層との接触面といえる
部分は、ごく薄い層状にやや灰色みを帯びている。
この4層からは内黒土師器や須恵器などの破片も
少量出土しているが、白磁、青磁、中国陶器など
の中国製遺物が最も目立つほか、中国系瓦の小片
が見られ、カムイヤキや滑石製石鏝小片などのほ
か、漁網錘とみられる陶錘が1点出土している。
ただし、以上4層の遺物は小片がほとんどである。

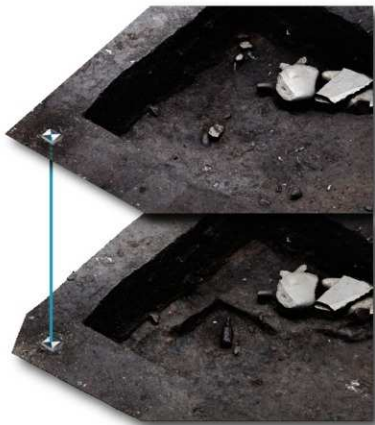


図18 第2地点1トレンチ2層遺物（昭和前期）出土状況の詳細記録（南東から）
上：ビール瓶検出面前、下：ビール瓶（大日本麦酒 図40-172）の出土状況と周辺のコンテクスト。

いずれも中世遺物であり、近世のものを含まない。したがって中世の層と考えられる。4層上面で4層に掘り込むピットが検出されたが、上の層からの掘り込みや樹痕とみられるものが多かった（図10・16）。また、4層下面（5層上面）で新たに発見された遺構はなかった。なお、上記遺物の時期については、白磁・青磁でも新相のものが多く、14～15世紀ごろのものが目立つ。前回調査した第1地点では、中世遺物は11世紀後半から15世紀にかけての遺物が出土しているが、12世紀代が中心であった。それと比較して第2地点の本トレンチは、中世初期の遺物を少量含んでいるが主体はそれより新しく、14～15世紀にずれるといえよう。確実な最も新しい遺物は15世紀とみられる。なお、4層下部の上面から採取した炭化材1点の放射性炭素年代（AMS法）を測定したところ、1 σ ではIntCal13でCal AD 1298～1324、1346～1372、1378～1393を示し、2 σ ではCal AD 1292～1400を示しており、調和的といえる（末尾の付録1を参照）。

5層：黄褐色粘質土層。明らかに人為の堆積でない自然に形成された層である。この上面を検出したところでトレンチの掘り下げをやめた（図11）。したがってトレンチの底面は5層上面である。本層上面には径1cm大の褐鉄錠（いわゆる高師小僧）が斑点状に広がっており、植物根は全て腐朽消滅し中空となっている。植物が繁茂していたことがうかがえる。この層の上面で新たに検出された遺構はなかった。なお、本層上面はわずかに傾斜するものの、近接する第1地点（平成26年調査）との間にはどこかに急な段差がある可能性があり、ある時点で本層上面が削平を受けたことも十分考えられる。もしそうであれば、直上に14～15世紀とみられる層が載っていることから、その頃かその直前に削平が行われた可能性が高いと考えられる。

1トレンチは調査終了後、現地説明会を経て埋め戻し、原状に復した（図12）。



図 19 第 2 地点 1 トレンチと土層 (1/50)
三次元計測に基づく。



図20 第2地点1トレンチの土層拡大(上段1/20、下段1/30)

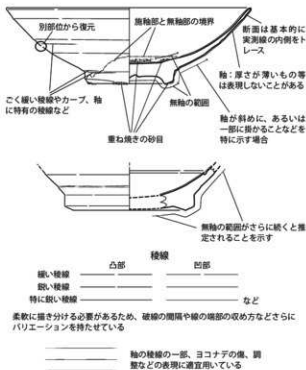
三次元計測。白線が主要層の境目と見られる部分。色付きの破線は主要層内の細分層またはブロックである。無理に線を引くことは避け、比較的確実なところのみを示している。

下段の図は、北壁西半と北壁との土層のつながりを示す。右下に小さく図示したように3Dモデルを斜めに切断し、北壁と南壁をオルソ画像で見通したものの。

第2地点1 トレンチの遺物

1 トレンチから出土した遺物（トレンチ周辺の採集遺物を含む）について、以下では便宜上、時代・種類のカテゴリーに分けて述べる。なお、本遺跡で主体となる中世を含む古代～近世を先に述べ、続いて縄文時代、近代以降の遺物を記載する。古銭については時代を問わず最後にまとめて記載する。

実測図の表現は、基本的に下のような表現としたので、図を利用される際の参考にされた。



本書における実測図の表現

なお、以下で述べる中国陶磁器の分類は、基本的に下記に基づく¹⁾。

太宰府市教育委員会(2000)『太宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財 49

上田秀夫(1982)「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2

小野正敏(1982)「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2

1 また、以下の文献をはじめ多くの調査報告書や関連文献を参照した。

『首里城跡』沖縄県文化財調査報告書 132、1998年、ほか
『今帰仁城跡』発掘調査報告 V』今帰仁村文化財調査報告書 29、2011年、ほか

瀬戸哲也ほか「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」『紀要 沖縄学』5、2007年

古代・中世の遺物

白磁(図 21)

1 は、白磁碗 IV 類。2 層出土。大きめの玉縁口縁をもつ。軸はやや黄みを帯びた灰白色、NCC0226 (8.5Y 7.9/1.6 アイボリー) を基調とし、より黄みの強い NCC0227 (7.3Y 7.2/1.9 パール・ページュ) までの変異があり、ほぼ不透明である。胎土は明黄灰色で、ガラス化の程度は弱い。11 世紀後半～12 世紀のものと思われる。

2 は、白磁碗 IV 類。4 層出土。玉縁口縁をもつ。軸は灰白色、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色)。胎土は灰白色で細かな空隙がある。11 世紀後半～12 世紀のものと思われる。

3 は、白磁碗 IV 類。4 層下部出土。玉縁口縁をもつ。軸はわずかに緑みを帯びた灰白色、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色)。胎土は灰白色。口縁部断面には作出法を反映するとみられる空隙がある。11 世紀後半～12 世紀のものと思われる。

4 は、白磁碗 IV 類。4 層下部出土。玉縁口縁をもつ。軸は透明度が高く、厚い部分でわずかに緑みを帯びる。NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色)。胎土は灰白色。11 世紀後半～12 世紀のものと思われる。

5 は、白磁碗 V 類の口縁部。2 層出土。内面に細い線が 1 条廻る。軸調は浅い緑みを帯び、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色)。胎土は灰白色で、断面は若干ガラス光沢がある。12 世紀中葉～後半のものか。

6 は、白磁碗 V-2 類。4 層出土。軸は NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色) を呈し、外面側は特に透明度が高く光沢が強い。胎土は灰白色。14 世紀後半～15 世紀前半頃のものか。

7 は、白磁とみられる碗。4 層上部出土。軸は青みがかった灰色で、NCC0611 (6.8Y 7.0/0.9 パール・グレー)。胎土は明灰色で、白色粒 <1mm を微量含む。外面の回転ヘラケズリの稜線が明瞭である。14 世紀ごろか。

8 は、白磁碗 VIII 類の底部。1 トレンチ東端の南側で検出された 18 号ピット埋土出土。外面は高台付近から高台内は露胎。内面は見込の軸を環状に掻き取る。軸調は全体に不透明で緑みを帯びた白色で、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色)。外面の軸にはピンホールが見られる。胎土は灰白色で、微細な黒色粒をごく微量含む。

9 は、白磁碗 IX 類の口縁部。4 層下部出土。薄手で、口禿である。口唇部を子細に見ると、外端面の上にさらに面が生じており、断面が多角形状になっている。軸調はやや緑みを帯び、NCC0466 (3.6GY 8.0/0.9 銀灰色) で、やや不透明。胎土は灰白色。口唇部内面の無軸部に 4mm の褐色粒を 1 個含む。IX 類は 13 世紀中頃～14

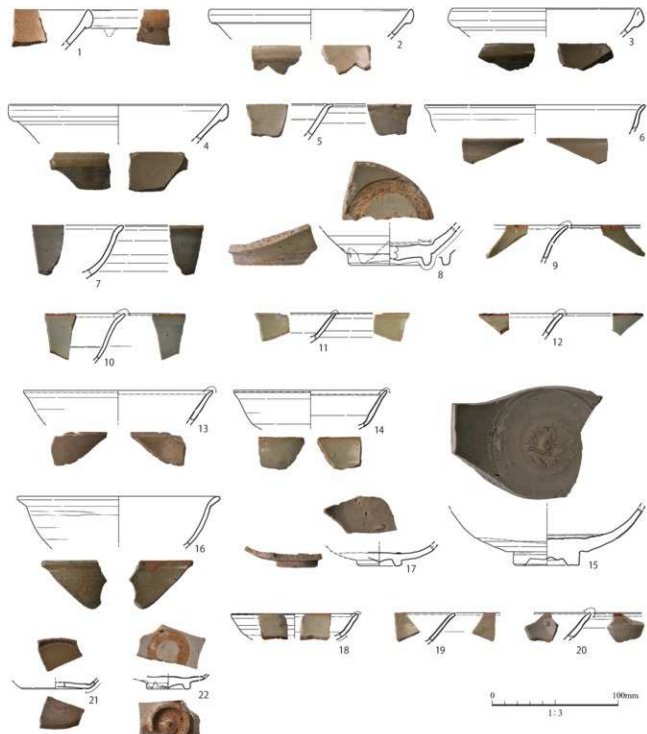


図21 第2地点1トレンチの遺物 白磁 (1/3)

紀初頭の標識で、13世紀後半～14世紀前半に増加するとされている¹⁾。

10は、白磁碗IX類。薄手で外反口縁をもち、口縁部は口禿である。内面に細沈線状の段が1条廻る。軸はNCC0610 (4.0GY 7.7/0.5 アクワレル) 胎土はやや灰みを

帯びた白色。13世紀中頃～14世紀前半に当たるものか。

11は、白磁皿IX類。口縁部は口禿である。軸はNCC0466 (3.6GY 8.0/0.9 銀灰色)で、透明度は低い。胎土はやや灰みを帯びた白色。13世紀後半～14世紀前半頃か。

12は、白磁碗IX類。2層出土。口縁部は口禿で、外反する。その露胎部には炭素が付着している。軸は厚く、

1) 太宰府市教育委員会(2000)による。前記文献。

NCC0514 (1.2GY 7.7/0.9 パール・グレー) で、透明度は高くない。胎土は灰白色。13世紀中頃～14世紀前半に当たるものか。

13は、白磁碗 IX 類。4層下部出土。口縁部は口禿で、露胎部は明灰色である。軸は薄い灰緑色。NCC0371 (5.5Y 7.4/1.4 グリー・グレ) で、透明度は高くない。胎土は灰白色。13世紀中頃～14世紀前半に当たるものか。

14は、白磁碗。2層出土。口縁部は口禿である。軸は厚く、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色) で、透明度は高くない。胎土は灰白色。13世紀中頃～14世紀前半のものか。

15は、白磁碗、4層出土。「ピロースタイプ」に属するもので、内面見込には印花文を施す。軸はやや灰みを帯び、NCC0515 (6.9Y 4.0/1.4 ムエツ) で、透明度が高い。底部付近は無軸で、灰白 (10Y 8/1)。胎土はやや黄みを帯びた明灰色で硬質。黒色粒 <0.5mm を微量含む。14世紀後半～15世紀初頭頃ののものか。

16は、白磁碗であろう。4層出土。小さめの外反口縁をもつ。軸は NCC0611 (6.8Y 7.0/0.9 パール・グレー) で全体に施されるが、口縁部内面をはじめ外面の一部に粒の発泡・変色が見られる。胎土は灰白色で微細な白色粒を含み、やや粗い。14世紀後半～15世紀前半頃か。

17は、白磁皿と思われる底部。2層出土。高台は径が小さく (34.5mm)、高台内は無巾状をなす。残存部の外面上部と内面に薄く施軸され、NCC0514 (1.2GY 7.7/0.9 パール・グレー) で、透明度は高い。他は露胎。見込に磁器質の重ね焼きの目跡がある。胎土は明灰白色で精良。

18は、白磁皿。口縁部は口禿である。小片のため復元径は不確実。軸は NCC0418 (6.8Y 7.9/1.1 銀灰色) で、軸がやや厚めの外面側は貫入が見られる。胎土は灰白色。13世紀後半～14世紀前半頃か。

19は、白磁皿。4層出土。口縁部は口禿である。軸はやや厚く、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色) で、透明度は高くない。胎土は灰白色。13世紀中頃～14世紀前半に当たるものか。

20は、白磁皿。4層下部出土。口縁部は口禿である。軸は NCC0611 (6.8Y 7.0/0.9 パール・グレー)。胎土は灰白色。13世紀中頃～14世紀前半頃か。

21は、白磁皿の底部で、IX 類とみられる。3層下部出土。軸は灰みを帯び、NCC0419 (5.2Y 7.2/1.4 グリー・シェル) で、透明度は比較的高い。胎土は灰白色。

22は、白磁皿の底部。2層出土。高台内天井部は無巾状。外面には無色透明軸が掛かり、高台～高台内は露胎。内面は軸を蛇ノ目状に掻き取っている。胎土は白色で小さな空隙を含む。15世紀のものであろうか。

青磁 (図 22・23)

23は、同安窯系青磁碗 III 類とみられる。4層上部出土。小さく外反する口縁をもち、外面に粗い櫛目文を施す。軸は灰みを帯びた褐色で、NCC0144 (0.1Y 5.4/3.9 ベージュ)、薄めに掛かるが透明度が低く、表面はマット。胎土は明灰色で空隙があり、微細な白色粒子を含む。12世紀中頃～後半か。

24は、同安窯系青磁碗 I-1 類。2層出土。外面には縦の櫛目文、内面にも櫛目文による文様の一部が見える。透明度が高くやや青みがかった軸、NCC0563 (0.2GY 7.0/1.1 ムエツ) を内外面に薄く施す。胎土は明灰色。

25は、同安窯系青磁碗 I-2b 類の底部。2層出土。内面にヘラ描き文と櫛によるジグザグ文がある。内外面とも軸が薄く掛かり、底部の縁高底状の凹みの内側のみ無軸。全面施軸後へうで掻き取ったものか。軸はごく薄い青緑色、NCC0514 (1.2GY 7.7/0.9 パール・グレー) で、薄く掛かり透明度が高い。胎土は明灰色。12世紀中頃～後半のものともみられる。

26は、龍泉窯系青磁碗 I 類。4層出土。3条の櫛目状工具による文様が見える。やや黄みを帯びた緑色透明軸、NCC0143 (0.5Y 4.4/4.4 小鹿色) が内外ともに施され、透明度は高めである。胎土は明灰色で、微細な白色粒を微量含む。

27は、龍泉窯系青磁碗 II 類。4層最下部 (5層直上) 出土。外面は鎚蓮弁を削り出しており、形態と文様から12世紀末～13世紀前半頃と推定しておく。軸調は黄みが強く、NCC0240 (0.1Y 5.6/3.7 灰汁色)。全体に貫入が見られる。胎土は黄色みを帯びた灰色。

28は、龍泉窯系青磁碗 II 類の口縁部。外面は鎚蓮弁を削り出しており、12世紀末～13世紀前半頃であろう。軸調はごく浅い緑で、NCC0514 (1.2GY 7.7/0.9 パール・グレー) で、透明度が高い。胎土は灰白色。

29は、龍泉窯系青磁碗 II 類の口縁部。4層出土。外面は鎚蓮弁を削り出しており、12世紀末～13世紀前半頃であろう。軸調は NCC0383 (7.0Y 5.0/3.6 ベージュ・グリーゼ)。胎土は灰色。

30は、青磁碗 II 類。1層出土。外面に鎚蓮弁文を施す。文様の一部は、外表面に現れた大粒の礫によって、文様を掘る動作にイレギュラーが生じている (周囲が削り残されている)。軸は、比較的透明度の高い灰みを帯びた緑色、NCC0479 (0.7GY 5.0/2.5 生壁鼠)。胎土は灰色。

31は、龍泉窯系青磁碗 I-2 類の底部。2層出土。内面見込には片切彫で草花文を施す。高台置付から高台内は露胎で、赤灰色を呈する。緑みを帯びた透明度の高い軸が比較的薄く掛かっている。断面は明灰～明黄灰色で、

胎土に白色粒・黒色粒 <1mm を微量含む。

32 は、龍泉窯系青磁碗の底部。3層最下部出土。外面には規則的な鑄蓮弁の下端が見られ、内面見込に印文を施す。諸特徴からみて II-c 類の可能性が高いと思われる。高台畳付～高台内は露胎。軸は灰みを帯び、NCC0624 (2.0GY 5.4/2.1 グリー・クレール) で、厚みがあるが透明度は比較的高い。胎土は灰白色で、空隙が比較的多い。13世紀であろうか。

33 は、龍泉窯系青磁碗の底部。2層出土。高台畳付～高台内は露胎。軸は灰みを帯びた暗めの淡緑色で、外面は NCC0382 (7.0Y 4.3/4.7 腐寛茶)、内面は NCC0383 (7.0Y 5.0/3.6 ベージュ・グリーゼ)、透明度が高い。胎土は橙気味の灰色で空隙があり、微細な白色粒子を含む。

34 は、青磁碗の底部。2層出土。高台はやや高く、内面見込に印花を施す。軸は比較的高い透明度の高い緑色、NCC0528 (1.2GY 5.2/3.2 ブロー) で、やや厚め。胎土は明灰色でやや空隙がある。

35 は、青磁碗の底部。4層出土。外面は高台畳付まで軸が見られ、高台内は一部軸が回り込んだ部分もあるが、基本は無軸。軸はやや鼠色がかっており、NCC0768 (1.3GY 5.2/2.0 シルバー・セイジ) で、厚く掛かっており透明度も高くない。そのため、内面見込に印文の有無は確認できない。胎土は明灰色から灰白色で、白色粒 <0.5mm を少量含む。14世紀頃か。

36 は、青磁碗。表採。外面は崩れた蓮弁文を施す。14世紀のものと思われる。軸調は不透明で灰みを帯び、NCC0863 (5.1Y 4.4/2.9 スノー・シャドー)。胎土は灰色で、底部を中心に厚めの部分の芯は灰橙色。露胎部は灰赤色。

37 は、青磁碗。3層最下部。外面はやや細めの片切形で蓮弁が描かれる。軸は薄い灰緑色、NCC0371 (5.5Y 7.4/1.4 グリー・グレ)。胎土は明灰色。14世紀と考える。

38 は、青磁碗。2層出土。外面には細弁の蓮弁が刻まれている。見込には印花がある。高台畳付から高台内は無軸。軸は比較的高い透明度の高い淡緑色、NCC0516 (4.7GY 6.6/2.3 リケン) が掛かる。胎土は灰白色。15世紀頃か。

39 は、青磁碗の口縁部。2層出土。軸はやや不透明な浅緑色で、NCC0516 (4.7GY 6.6/2.3 リケン)。外面に雷文帯があり内面にも横方向を基調とする線の一部がかすかにうかがえるが、軸がかなり厚く掛かっているため詳細は見えない。胎土は灰白色。上田分類 C 類で、雷文の特徴から概ね 14 世紀後半～15 世紀のものであろう。

40 は、青磁碗。1層出土。内外面にへら彫り文様を施し、外面の口縁帯に雷文が見える。軸は透明度の高い淡緑色、NCC0515 (7.6GY 7.0/3.0 菓菜色) で、胎土は白。15世紀初頭～半ば頃か。

41 は、青磁碗。1層出土。外面の口縁帯にへら彫りの雷文が見える。淡緑色の釉、NCC0516 (4.7GY 6.6/2.3 リケン) が厚めに掛かり、ガラス中の微細な気泡のためやや不透明。胎土は灰みを帯びた白で、空隙がある。なお、一見内面にへら彫りの文様があるようにも見えるが、胎土の空隙が亀裂状に表面に表れているようである。15世紀初頭～半ば頃か。

42 は、龍泉窯系青磁碗 IV 類。4層最下部 (5層上) 出土。外面に蓮弁文がある。軸はやや黄色みを帯びた緑で、NCC0239 (9.8YR 4.6/3.8 グレージュ)。透明度が高く、貫入がある。胎土は明灰色。14世紀代とみられる。

43 は、青磁碗。1層出土。外面に雷文が崩れたとみられるへら彫りの文様があり、軸は比較的高い透明度の高い灰緑色、NCC0815 (3.6Y 4.4/2.7 スノー・シャドー)。胎土は灰白色。16世紀頃か。

44 は、青磁碗。2層出土。小ぶりな直口碗で、口縁部外面に簡略化した文様を施しており、上半は雷文帯、下半は蓮弁に相当するものであろう。軸はわずかに薄緑色、NCC0612 (7.9GY 6.7/1.3 マーブル・グレー) で、透明度は高くない。胎土は灰白色で大小の空隙がある。15世紀前後であろう。

45 は、青磁碗。小さな外反口縁をもつ。軸はやや黄みを帯びた暗緑色、NCC0238 (0.1Y 4.0/3.6 空五倍子色) で、やや厚めに掛かる。透明度は並。胎土は灰色で、白色粒 <0.5mm を少量含む。14世紀半～15世紀初頭頃か。

46 は、青磁碗の口縁部。1層出土。小さく外反する口縁部をもち、濃いオリーブ色の釉、NCC0719 (7.0Y 4.5/3.4 曉鼠) をかなり厚く掛けている。胎土は灰色で硬質。

47 は、青磁碗。4層下部出土。軸は浅緑色、NCC0515 (6.9Y 7.0/1.4 ムエット) で、透明度は比較的高い。胎土は明灰色で、白色粒 <1mm を微量含む。

48 は、青磁碗。4層最上部出土。小さな玉縁状の口縁部である。軸はやや灰みを帯び、NCC0480 (2.7GY 5.8/2.4 ブロー) で、透明度は高くなく表面はややマットである。胎土は灰色で、白色粒 <0.5mm を含む。

49 は、青磁碗。4層出土。軸は薄緑色、NCC0370 (5.4Y 8.1/1.1 雪色) で、厚めに掛かり不透明で全体にマットである。胎土は明灰色で粗く、黒色粒 <0.5mm を含む空隙が見られる。15世紀前半～半ばのものか。

50 は、青磁碗とみられる底部。4層下部出土。見込に印花による草花文が施される。高台外面までと内面は透明度の高い軸が施され、NCC0564 (6.5GY 6.6/1.9 マーブル・グレー)。厚みのある箇所は青緑色を帯びる。高台畳付～高台内は無軸で、やや暗めの灰色を呈する。胎土は明灰色。

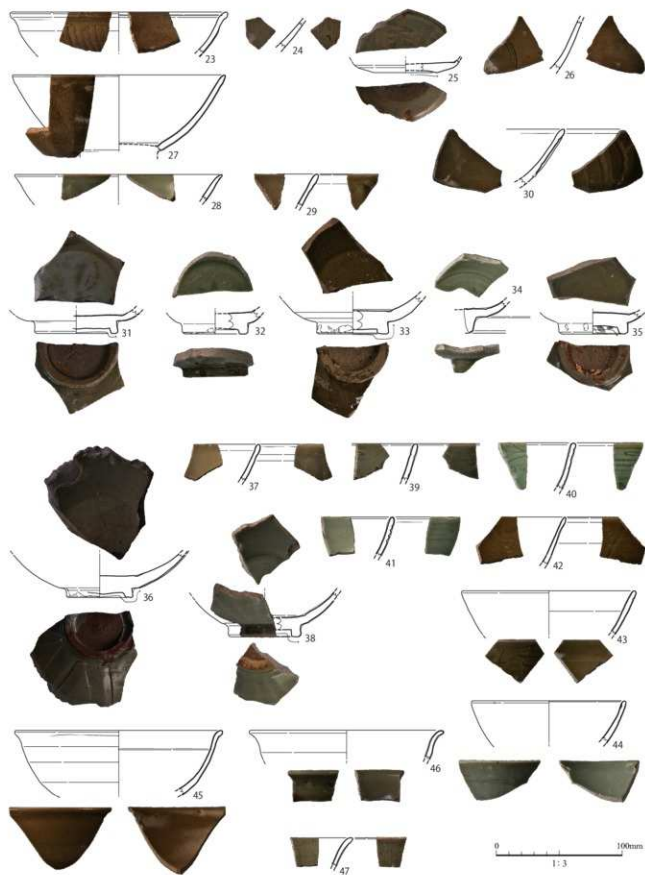


図22 第2地点1トレンチの遺物 青磁① (1/3)

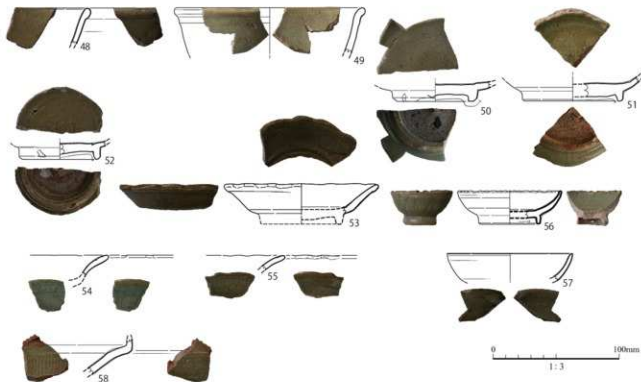


図23 第2地点1トレンチの遺物 青磁② (1/3)

51は、青磁碗の底部。2層出土。見込の中心部にスタンブ文がある。高台内面は露胎で、他は厚めに施釉される。釉調はNCC0420 (0.65GY 7.0/2.1 青白椽)、失透だが表面はややマットで、全体に貫入がある。胎土はガラス化の程度が低く、高台～見込の厚い部分は内外ともに浅黄橙、他は灰白色で、全体に小さな空隙が分布する。

52は、青磁皿と思われる。2層出土。内面見込に片切彫の團線と、印花を施す。内外面にやや灰みがかかった緑色の釉、NCC0432 (7.1Y 5.8/2.8 オセロ) を施すが、外面は高台置付までやや厚みがかかっており、高台内は釉を拭き取る。露胎部は暗紫灰色。胎土は灰色でやや空隙がある。15世紀前半～半ば頃か。

53は、青磁稜花皿。2層出土。外反口縁で口唇部を切って稜花としている。釉調はやや透明度が高い暗緑色で、NCC0862 (6.8Y 3.8/3.0 トープ)。胎土は灰色で、微細な白色粒子を少量含む。15世紀前半～半ば頃か。

54は、青磁稜花皿の口縁部。2層出土。外反口縁の内面に線彫による草花文を施す。釉調はやや透明度が高い青緑色で、NCC0612 (7.9GY 6.7/1.3 マーブル・グレー)。胎土は灰白色で、微細な黒色粒子を少量含む。

55は、青磁稜花皿の口縁部。4層上面出土。外反口縁の内面に線彫工具による3条の線が見られる。釉調は透明度が高い青緑色で、NCC0612 (7.9GY 6.7/1.3 マーブル・グレー)、内外ともに貫入が見られる。胎土は灰白色で

空隙があり、微細な白色粒子を含む。15世紀前半～半ば頃か。

56は、青磁皿で、直口の蓮弁文皿。2層出土。外面に蓮弁文、内面に平行斜線状に文様が施される。口唇部は刻目状になっており、ヘラ状の工具によるものか。釉は浅緑色、NCC0467 (1.6GY 7.3/1.1 グリーシェル) で、厚く掛かる。高台内天井部のみ無釉。胎土は灰白色。

57は、青磁直口口縁皿。2層出土。無文のようではあるが、断面の外面下半の一部にくぼみが見られ、文様を持つ可能性がある。釉は灰みがかかった緑色、NCC0528 (1.2GY 5.2/3.2 ブローロー) で、厚みが透明度は高い。胎土は暗灰色でやや粗い。

58は、青磁盤の口縁部付近。2層出土。内面に数本単位の櫛で放射状に文様を施す。釉は不透明で淡緑色、NCC0468 (5.4GY 7.0/2.1 グリーシェル) で、内外に厚く施され、全体に貫入が見られる。胎土は黄灰色から赤褐色まで部分によって遷移し、白色粒子<0.5mmを含む。ガラス化の程度は弱い。

青花 (図24)

59は、青花碗とみられる口縁部。2層出土。呉須で花卉文らしき絵柄を施す。わずかに青みを帯びた無色透明釉が掛かる。胎土は白色で微細な空隙が若干見られる。

中国陶器 (図 24・25)

60 は、中国陶器の小型の盤とみられる口縁部。2層出土。やや扁平な玉縁状の口縁で、回転ナデ。破片の外側～内面上半は無軸であるが、内面下半（および口縁部内面の一部）には薄く施軸され、光沢のない褐色、NCC0044 (4.8YR 3.6/4.7 褐色) を呈する。無軸部は外面が褐灰 (5YR 4/1)、内面が暗赤灰 (10R 4/1) ～一部にぶい赤褐 (7.5R 4/3)。胎土は灰赤色で硬質。微細な白色粒 <0.5mm を少量含むほか、鉱物が溶けて発泡した黒灰色の盛り上がりが見られる。

61 は、中国陶器の小鉢と考えられる小型品の口縁部。4層最上部出土。外面は光沢のない緑みを帯びた灰黄色の釉、NCC0180 (1.0Y 7.1/2.7 オイスター) を薄く施すが、口縁部上面～内面は拭き取りのようである。外面露胎部にはぶい黄橙 (10YR 6/3)、内面は浅黄橙 (10YR 8/3)。胎土は黄橙色でやや軟質、赤褐色粒 <1mm を少量含む。

62 は、中国陶器の鉢と考えられる口縁部。4層出土。内外ともごく薄く施軸されていたようであり、破片下半はわずかに厚くなっているが、釉は風化し白化している。本来は黄～緑か。断面は暗灰色、芯が暗赤褐色である。粗い胎土で、白色粒 <2mm を多く含む。

63 は、中国陶器の鉢の口縁部。4層上部出土。外面は灰緑色の釉で胎土中の鉱物由来かと思われる白色・黒色の細かな粒状斑点が全体に広がる。口縁部上面～内面は淡黄緑色、NCC0233 (2.3Y 5.9/7.9 黄朽葉) である。断面は赤褐色で、外面の表面近くは黒みがある。粗い胎土で、白色粒 <1mm を多く含む。

64 は、中国陶器で、鉢と思われる。4層から出土した2片を、色調や胎土等の状況から同一個体のと思われる可能性が高いと判断し、図上で推定復元した。うち口縁部片は内外面とも基本的に無軸で、回転ナデのち、破片の外側下半は横～斜めのナデ、内面はナデで仕上げている。別の破片は体部と考えられ、外面は斜め方向を主とするナデ、内面は横方向を基調とする工具によるナデである。この破片も内面はナデであるが、外面は施軸の可能性があり黒灰～暗緑灰色を呈するが、窯での表面のガラス化や自然釉の可能性も一応考えられる。胎土は赤褐色で、器壁と平行に薄い層状に白色の筋が入っており、全体に硬質で破面はガラス光沢に富む。微細な透明・白色粒 <0.75mm を多く含む。

65 は、中国陶器とみられる播鉢の底部。2層出土。全体に無軸で、外面は褐灰 (7.5YR 4/1) で、底面に至ると暗灰色になる。内面は灰黄褐 (10YR 4/2) である。ただし埋没環境による汚れの可能性があり、本来は灰色であろう。胎土は赤褐色で、破面は白く薄い編が見える。

白色粒 <0.75mm を微量含む。

66 は、中国陶器の耳壺IV類とみられ、頸部であろう。沈線2本が見えるが、破片のため本来の数は不明。四耳をもつものと思われる。2層出土。内外ともに回転ナデ。外面は灰緑色、NCC0288 (4.0Y 6.1/3.2 灰色) の釉が薄く掛かるがわずかに無軸部があり、内面は無軸部に外面と同様の釉が付着・垂れている。胎土は褐灰で、白色、褐色粒 <0.5mm を少量含む。13世紀代か。

67 は、中国陶器で、壺の胴部であろう。4層出土。内外ともに回転ナデ。内外面ともに淡緑褐色、NCC0186 (1.1Y 5.1/7.6 パフ) の釉が薄く掛かっており、内面はより薄く、風化が見られる。胎土は橙で、白色、褐色粒 <0.5mm を少量含む。

68 は、中国陶器の壺の胴部。4層出土。内外ともに回転ナデで、外面は轆轤目が顕著である。外面は褐色気味の黄緑色、NCC0238 (0.1Y 4.0/3.6 空五倍子色) の釉、内面は淡黄緑色、NCC0240 (0.1Y 5.6/3.7 灰汁色) の釉が薄く掛かる。胎土は灰色で、黒色粒 <0.5mm を少量含む。

69 は、中国陶器の底部で、壺であろう。4層出土。内外ともに回転ナデで、底面は無調整に近いと思われる。外面は無軸で褐灰 (5YR 6/1)、内面は灰緑色の釉が一部に見える。胎土は明褐色で、白色粒、黒灰色（溶けている）<2mm をやや多く含む。

70 は、中国陶器で、耳壺の耳の部分とみられる。2号ピット出土。全面に灰白色の釉、NCC0227 (7.3YR 7.2/1.9 ベール・ページ) が施される。胎土はぶい橙色で、白色、黒色粒 <0.5mm を含むが、黒色粒は溶けている。

71 は、中国陶器で、小壺か。4層下部出土。肩部付近とみられる。外面は施軸されるが風化しており、現状で明緑灰色を呈し、内面は無軸。内外面ともに回転ナデによる成形痕が残る、内面はさらにシボリ痕がある。胎土は橙色。白色粒 <0.75mm を微量含む。

72 は、中国陶器とみられる胴部片で、小壺としておく。2層出土。沈線が1条廻っている。内面は回転ナデ痕が残る。外面は淡緑灰色の釉、NCC0468 (5.4Y 7.0/2.1 グリーシエル) が施され、内面は無軸で暗灰黄 (2.5Y 5/2) ～ぶい黄 (2.5Y 6/3) を呈する。胎土は灰色で白色、暗灰色粒 <0.5mm を含む。

73 は、中国陶器で、我々が「宝珠形陶製品」と呼称しているものの肩部片の可能性が考えられる。トレンチ周辺での表探。釉は緑みを帯びた灰褐色、NCC0285 (3.1Y 3.8/3.3 瑞寛茶)。内面は無軸で轆轤使用による水挽痕が明瞭で、内表面・断面ともに灰褐色～明黄灰色である。胎土に褐色・黒褐色粒を少量含む。小壺等の可能性もあ

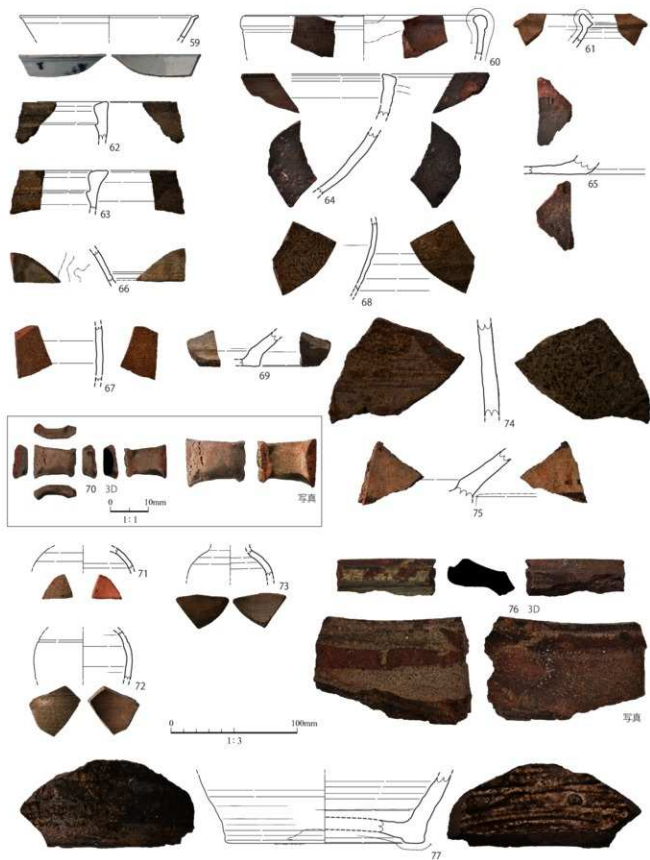


図24 第2地点1トレンチの遺物 青花、中国陶器① (1/3、70は原寸大)
59は青花、他は中国陶器。



図25 第2地点1トレンチの遺物 中国陶器② (1/2)、朝鮮系陶器 (1/3)
78は華南三彩とみられる。79は高麗無軸陶器。

るため断定はできないが、宝珠形陶製品であれば、これまで国内での報告例は博多遺跡群と本遺跡第1次調査のみであり、今回資料を追加したことになる。小片ではあるが考古学的に重要な意義をもつ資料である。

74は、大型の中国陶器の胴部。2層出土。外面は全面に暗緑色の透明釉、NCC0381 (7.2Y 3.7/4.0 鈍色)が見られ、釉の表面は水滴状の凹凸が著しい。内面にも薄く施される。胎土は1~2mmの白色粒をかなり多く含み、0.5~1mmの黒色粒を微量含む。

75は、中国陶器の底部で、大型の壺類であろう。4層最上部出土。内外ともに淡緑黄色、NCC0177(0.3Y 7.9/2.3 鳥の子色)の釉が掛かっており、破片のごく下端は無釉で黒褐 (7.25YR 3/2)。胎土は、表面近くは外面側が暗灰色、内面側が暗灰~橙で、主体となる中心の灰色部分を挟んでいる。白色粒 <1mmを含む。

76は、中国陶器の大型甕の口縁部である。4層最上部出土。口縁部外面から上面にかけて釉を拭き取ったようであり、口縁部下面には拭き取り痕とともに黄灰色の釉が薄く残る。口縁部上面は赤褐色~暗赤褐色、断面は赤褐色、芯は灰色。白色砂粒 <1.5mmを多く含む。13世紀のものか。

77は、中国陶器の底部。耳壺とみられる大型品である。2層出土。内外に褐釉が掛かっており、外面は暗褐色~黒褐色、内面は暗緑褐色。底部は無軸だが胎土目とみられる付着物がある。器壁は焼影れによる大きな空隙があり、表面の凹凸に反映しているようである。胎土は灰紫色で、白色の砂礫 <3mmを少量含む。

78は、中国陶器とみられ、華南三彩の可能性が高いと考える。2層出土。器種・形態が未同定のため、仮の位置で図示した。緑釉は表面がやや風化し光沢を失った部分が多いが、釉溜りには光沢があり鮮やかな緑、NCC0521 (9.6GY 4.6/7.8 ガゾン)である。細い突出部には黄釉、NCC0232 (3.1Y 6.5/8.9 マスタード)を施す。外面は細部のシワから型作りと思われる、内面には強いユビナデ痕がある。胎土は淡黄 (2.5Y 8/3)で精良。華南三彩とすれば16世紀後半~17世紀初頭の蓋然性が高いと考えるが、詳細な調査研究は今後に委ねたい。

朝鮮系陶器 (図25)

高麗無軸陶器が1点のみ出土している。

79は、高麗無軸陶器。壺の肩部上位と推定できる。2層出土。薄手で、外面はタタキ痕。1回分のタタキ目の全容は定かではないが、多条の平行タタキの凸線に直交する細凸線1条が伴う。タタキ目は角度を変えて綾杉状に施されているように見える。内面はヨコナデによる平滑な仕上げであるが、皿状のわずかな窪みの連続が観察でき、下地の当て具痕がヨコナデですり消されたものと考えられる。外面にはごく薄い自然釉が見られる。外面は灰 (N 4.5/0)、内面はやや明るく、灰 (N 5/0)程度である。胎土にはぶい赤褐色を呈し、白色粒 <1mmを少量含み、同質の白色粒 1mmを稀に含む。第1次調査1トレンチでも破片が複数出土し壺1個体分と推定したが、それと特徴がよく似ている。

中国系瓦 (図26・27)

中世中国系瓦 (以下、「中国系瓦」とする) は、これまでの蛍光X線分析による胎土分析の成果から中国浙江省の寧波産と考えられる。基本的に砂粒 <0.3mm を少量含む程度のいわゆる精良な胎土であり、また断面にマーブル状の縞模様が確認できるものが多い。胎土の色調はいずれも基本的に灰白 (N 8/0、7.5Y 8/1、10Y 5/1 を主とする) を呈する。

同種の瓦は第1次調査で多く出土しており、基本的に今回と共通する特徴を示す。瓦の表面の色調は、概ね下記の①～③のように分類できるとみられ、それに基づいて記述する。

- ①灰白 (5Y ~ 7.5Y 8/1、10Y 8/1、N 8/0) 程度を主とする、「灰白色系」
- ②暗灰 (N 3/0)、灰 (N 4/0) 程度を主とする、「黒灰色系」
- ③明褐灰 (5YR 8/1 ~ 7/1) にぶい橙 (7.5YR 7/3) ~ 灰白 (10YR 8/1 ~ 8/2) ~ 浅黄橙 (10YR 8/3 ~ 8/4) 程度を主とする、「黄橙色系」

報告にあたり、使用する用語についてふれておく。本遺跡で出土する中国系瓦は基本的に「桶巻作り」であり、截頭円錐形ないし円筒形の型 (模倣) に巻いたものから平瓦は一度に4枚、丸瓦は2枚に分割して製作される。どちらにも、分割する際にあらかじめ凹面側に「分割線」と呼ばれる切込を入れるが、それにより生じた面を「分割面」と呼ぶ。通常、瓦の厚さの1/4 ~ 1/2ほどまで切り込んで、それが割りとされる。このとき破面が生じるが、普遍的であるため特段言及はしない。

なお、これらの平瓦・丸瓦はともに、凹面に「布目痕 (布目圧痕)」と「枠板痕 (模倣痕)」が残るのが普通で、枠板の「縞紐痕」が見られることもある。これらは内型となる桶状ないし筒状の製作具の形状と使用した布が転写されている。また、凸面には「縄目タタキ痕」や「横ナデ」などの痕跡がある。この縄目タタキ痕は、タタキ具が転写されたもので、ここに掲載した瓦の縄目タタキ痕は、第1次調査で出土したものと同様、ほとんどが右捻りの縄が用いられている。

本調査地点では、中国系瓦片が70点以上出土しているが、実測に堪える資料のうち80 ~ 91は平瓦、92 ~ 97は丸瓦とみられる。今回は明らかに軒瓦といえるものは見られなかった。

平瓦と丸瓦が出土しており、以下では平瓦、丸瓦の順に記す。

平瓦 (図26)

80は、2層出土。広端部である。凹面は布目痕のほか、縞紐痕の可能性のある小さなくぼみが左下にあり、その部分の分割面は欠損するが縞紐痕とすれば本来分割面にかかっていたと推測される。凸面は縞の強いナデ痕があり、その下端部に段差が生じている。そのナデ痕をヨコナデが切る。凹凸ともに灰白色系。

81は、2層出土。凹面の布目痕は、ごく一部にわずかに布目らしき痕跡が見えるにとどまる。やや摩滅しているとはいえ、当初よりこの部位にはほとんどなかった可能性が高いと思われる。側面には浅い分割面がある。凸面は縄目タタキ痕のち縦方向のナデ。凹凸ともに灰白色系。

82は、4層下部出土。広端部である。凹面は、布目痕があり、2か所に縞紐痕が見られる。うち1つは分割面にかかる。側面には分割面がある。凸面の縄目痕は見えないが、それがナデによるものかどうかは表面が多少摩滅していることと相俟って確かではない。わずかに暗色の部分もあるが、凹凸ともに基本的に灰白色系。

83は、4層出土。凹面は布目痕、枠板痕があり、側面にはごく浅い分割面がわずかに遺存する。凸面は縄目タタキ痕がある。凹面は黄橙色系 (10YR 7/2 にぶい黄橙)、凸面は灰白色系で一部が黒灰色系。

84は、4層出土。狭端部である。全体にやや摩滅しており、凹面に布目は一部しか見られないが縞紐痕らしき窪みがある。狭端面はヨコナデ、凸面には縄目タタキ痕がある。凹凸ともに灰白色系。

85は、4層出土。凹面は布目痕、枠板痕がある。側面には浅い分割面が見られる。凸面は縄目タタキ痕のちヨコナデ。凹面は灰白色系。側面から凸面にかけては、黒灰色系と、一部灰白色系。

86は、4層出土。凹面は一部に布目痕が残る。凸面は縄目タタキ痕のち縦方向のナデ、横位の擦痕が見られる。凹面が黒灰色系で凸面が灰白色系。

87は、4層出土。広端部である。凹面は破片上端に縞紐痕が2か所あり、さらに分割面にかかるもう1つの縞紐痕がある。凹面の広端縁には広端面に平行して浅い段差が生じている。凸面は表面がやや一部に工具痕が残る。凹凸ともに灰白色系。

88は、4層出土。狭端部である。凹面は布目痕、枠板痕がある。凸面は、狭端面に平行して横位の段差が生じている。ごく一部に縄目タタキ痕とみられる痕跡が見えるのみであり、やや摩滅しているため定かではないがヨコナデ等により消えたものと思われる。凹凸ともに灰白色系で凸面の一部のみ黒灰色系。

1 これらの用語は、佐原真(1972)『平瓦桶巻作り』『考古学雑誌』58(2)に従う。

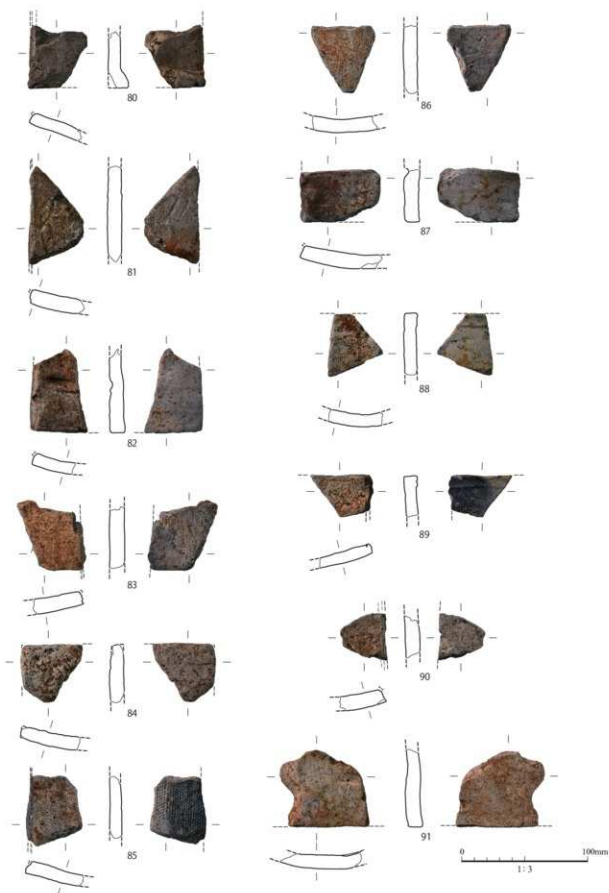


図26 第2地点1トレンチの遺物 中国系瓦① (1/3)
平瓦

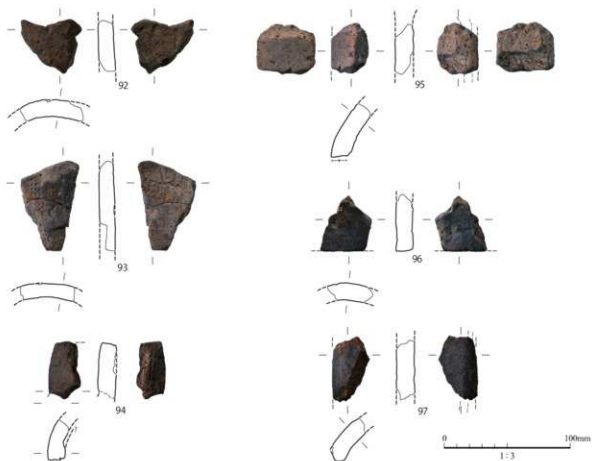


図27 第2地点1トレンチの遺物 中国系瓦② (1/3)
丸瓦

89は、4層下部出土。狭端部である。凹面は摩滅しており、縦紐痕の窪みがかかるように残る。浅い分割線があるが、実際の分割ではやや外側から割れている。狭端面はヨコナデ。凸面は縄目タタキ痕と、狭端面に平行して狭端縁にタタキかヨコナデによる段差が生じる。凹面は灰白色系。狭端面・側面から凸面にかけは黒灰色系。

90は、4層出土。凹面は布目痕があり、側面には分割面が見られる。凸面は縄目タタキ痕と縦方向・斜め方向のナデが見られる。凹凸面ともに灰白色系。

91は、地山直上出土。広端部である。やや摩滅気味だが、凹面は一部に布目痕、縦紐痕が残る。縦紐痕の中は布目が明瞭である。凸面は破片の上半に縦方向のナデ、下部の一部にヨコナデが残るがほぼ平滑に仕上げられている。縄目タタキ痕はそれらの調整ですり消された可能性が考えられる。凹面は灰白(2.5Y 8/1.5)だがやや黄みを帯びる。凸面へ広端縁は灰白色系が主だが部分的に黄褐色系。

丸瓦 (図27)

92は、表採。全体的に摩滅しており、凸面、凹面ともに痕跡が不明瞭であるが、それぞれ縄目、布目とみられる痕跡が、ごく一部に遺存する。実体顕微鏡で観察したところ縄目は左撻であり、少数派に属する。胎土中に6mmの赤黒色の礫、赤褐色の軟質の塊が1個ずつ見える。前者は水酸化鉄等の可能性があり、後者は胎土とほぼ同質の不純物が発色した可能性がある。凸面は黒灰色系で、凹面は風化のためか表面は薄膜状に灰黄褐(10YR 5/2)になっているが、そのすぐ下は黒灰色である。

93は、2層出土。丸瓦と分類したが、平瓦の可能性も否定はできない。凸面は縄目タタキ痕のち縦方向のナデ。凹面は布目痕、枳板痕がある。凸面は黒灰色系、凹面は灰白色系。

94は、4層最上部出土。玉縁部とみられる。凸面はヨコナデで、下端は強めにヨコナデされているようである。玉縁面にもヨコナデ痕がある。側面は分割面がある。凹面は抉れた部分があるが、本来の表面かどうかは不明

である。黒灰色系。

95は、4層出土。丸瓦の頭部付近であろう。凸面は部分的に縄目タキ痕が見られ、ナデ消された可能性がある。側面には分割線があるが破面は見られず、2回のストロークで切り離した可能性がある。ただし、やや摩滅しているため確実とはいえない。内面側の分割線は1/2程度の深さまで及んでいる。また、それに平行してもう1本の分割線とみられる細い沈線状の線があり、これも本来深かったことが観察からわかる。この破片においては、分割線と少なくとも2回、あるいは3回入れたことになる。凹面は布目痕があり、縦方向の擦痕がある。全体に表面は灰白色系だが、内外面ともにその直下が黒灰色系であり、本来黒灰色であったかその意図があったものと思われる。

96は、4層下部出土。下端面である。凸面は下部に縦方向のナデ痕が見られるが、他の工具痕等は確認できない。下端面には草本類の葉か茎のような圧痕が残っており、無調整であろう。凹面は風化のためか調整痕等は見えない。黒灰色系。

97は、4層最下部出土。凸面は縄目タキ痕がある。側面には分割線があるが、凹面との境はナデによって角が丸くなっており、珍しい加工といえる。凹面は、破片の下端に布目痕が残るが、その上方は布の抜き取り痕とみられる縦の擦痕がわずかに見える。黒灰色系。

列島産古代・中世の土器・陶器 (図28・29)

以下では国産の土器・陶器等について述べる。

98は、土師器。椀の体部とみられる小片で、内面に丹塗磨研を施す。4層出土。全体に摩滅しているため調整は不明瞭だが、回転ナデ成形。内面は丹塗のち横方向のミガキが施されているようである。色調は外面が灰白(10YR 8/2)、内面は丹塗の下地は外面と同様で、芯は黒灰色。胎土は砂粒(石英・長石・火山ガラス) <1mmを含み、岩片2mmが1個見える。

99は、土師器。杯の底部から立ち上がりにかけての小片。5層上面(地山直上)出土。全体に摩滅のため調整等は不明、内面はやや赤みがかっているため丹塗が施されていた可能性も一応考えうる。色調は全体に浅黄褐色である。胎土は砂粒(石英・長石・少量の黒色鉱物) <0.5mmを少量含む。

100は、土師器。径は小片から割り出したが大きく変わることはないと考えられ、平底の杯と推定する。4層下部出土。全体に摩滅のため調整等は不明であるが、底部形状等からヘラ切りとみられる。色調は全体に灰白色である(10YR 8/2程度)。砂粒(石英・長石・少量の黒

色鉱物・火山ガラス) <0.5mmを含む。

101は、内黒土師器(黒色土器A類)椀の底部。4層出土。外面は回転ナデ、内面は回転ナデのちミガキ。色調は外面が橙(5YR 6.5/6)、内面が黒(7.5YR *1.7/1)である。胎土は砂粒(石英・長石・黒色鉱物・火山ガラス) <0.5mmを並量含む。

102は、両黒土師器(黒色土器B類)椀。2層出土。内外面とも回転ナデのちミガキで、内面はミガキにより平滑になっている。色調は褐灰(10YR 4/1)で部分的にふい黄橙(10YR 7/4)である。胎土は砂粒(石英・長石・黒色鉱物・微量の軟質赤褐色粒) <0.3mmを少量含む。

103は、瓦器椀の底部。2層出土。外面残存部は回転ナデ、内面は回転ナデのちミガキ。色調は外面が灰白〜黄橙(10YR 8/2.5)、内面が褐灰(10YR 6/1)である。胎土は、比較的硬質で、特に内面側で還元が強く、芯は淡橙色。砂粒(石英・長石・黒色鉱物・火山ガラス) <0.5mmを並量含む。

104は、須恵器裏の口縁部。4層出土。外反する短い口縁とみられる。外面にはタキ目らしき条線がわずかに残るが、ヨコナデによって消えている。色調は、外面がオリブ灰(2.5GY 6/1)、内面が灰白(7.5Y 7/1)である。胎土は灰白色、白色砂粒 <2mmを少量含む。表面はやや風化しているようであるが、自然軸は見られない。

105は、須恵器の裏であろう。4層最下部出土。外面は平行タキ(一部襜褸子状)、内面には同心円とみられる当て具痕のちナデ。胴部上位〜肩部付近の破片と推定する。色調は外面が灰白(7.5YR 7/1)、内面が灰白(N 7/0)で、胎土は灰色。白色粒 <1mmを含む。古代であろう。

106は、須恵器の裏であろう。4層出土。外面は平行タキ、内面には指頭圧痕・当て具痕のちナデ。当て具は、ごく一部に同心円と思しき痕跡がある。ナデ痕は粗い布様のものによると思われる、一部に布痕用の破片がある。これらの特徴から裏の胴部上位〜肩部付近の破片と推定する。色調は外面が灰(7.5YR 6/1)、内面がオリブ灰(2.5GY 6/1)で、胎土は灰色。白色粒 <1mmを含む。古代であろう。

107は、東播磨系須恵器で、片口鉢であろう。4層出土。外面〜口縁部内面は回転ナデ痕が見られる。体部内面は平滑で砂礫が多めに露出しており、使用による可能性が考えられる。口縁部外面のみ暗灰色で、他は胎土に至るまでやや黄みを帯びた灰白(5Y 8/2)。胎土はやや軟質で、砂 <2mmを含む。12世紀中頃〜後半のものか。なお、同一層で、色調・胎土・調整が類似し、口縁部形態が多少異なる破片がある。接合しないか両者の出土位置は中心間で水平距離約19cm、レベル3.5cmしか離れておら

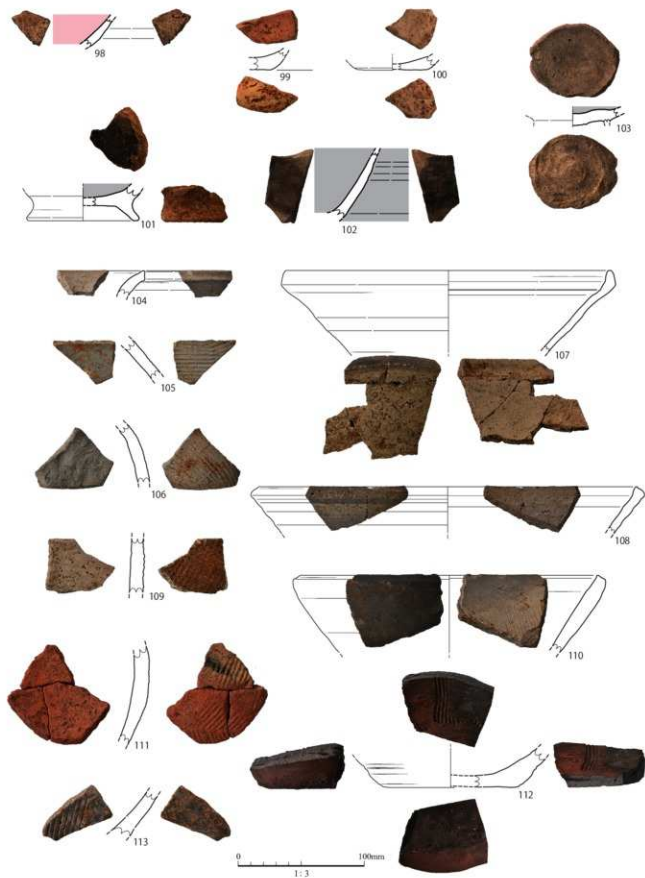


図 82 第2地点1トレンチの遺物 列島産古代・中世の土器・陶器① (1/3)

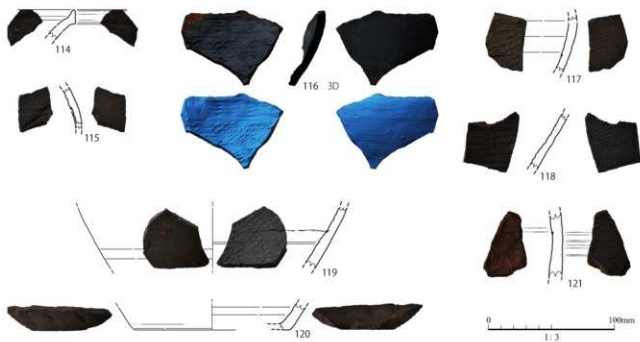


図29 第2地点1トレンチの遺物 列島産古代・中世土器・陶器② カムイヤキ (1/3)



図30 第2地点1トレンチの遺物 滑石製品 (上段は原寸大、下段は1/3) 三次元計測。

ず、同一個体の可能性が考えられる。

108は、東播系須恵器の片口鉢。2層出土。回転ナデ。色調は外面口縁部が灰白(N 7/0)～灰(6/0)で、その他は灰白(10Y 7.5/1)。胎土は灰色で、砂(白色) <2mmを多く含み、礫5mmを1個含む。12世紀末～13世紀初頭頃か。

109は、中世須恵器とみとめておく。5層上面(地山直上)出土。やや瓦質に近く、外面は格子目タタキ、内面はナデで平滑。外面は埋没環境の影響で鉄分が付着しており本来の色調は定かではないが、器面は灰色のようである。内面・胎土は灰白(2.5Y 8/1)で、胎土も灰白。胎土には砂粒(無色透明・白・黒) <0.5mmを少量含む。

110は、中世須恵器の播鉢。4層出土。内面は斜めのハケ目後、櫛歯状の工具で櫛目(12+α本)を入れており、内面左端には次の櫛目単位の右端が見える。外面から口縁部内面付近は灰(N 6/0)、内面下位はやや黄みを帯びた灰白(5Y 7/1)。胎土は暗灰色と灰色がマーブル状で、芯は暗灰色。砂粒 <0.3mmを微量含む。

111は、中世須恵器とみられ、糞であろう。4層出土。

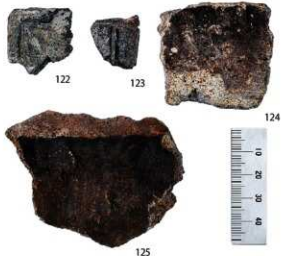


図31 滑石製品写真
図30の資料と対応。

多少風化しており色調等から土師器のようにも見えるが、重厚で破片断面は灰色で硬質である。外面に綾杉文タタキ目があり、内面は比較的平滑で一部にハケメ状の擦痕が見える。外面は橙(5YR 6/7)が主体で、部分的に浅黄橙色、黒灰色。内面は橙(2.5YR 7/7)～一部黄橙色。東播系須恵器で14世紀と考える。

112は、備前の播鉢の底部。2層出土。全体に無軸。外面は回転ナデであり、底面は無調整のようである。内面には播目があり、7本櫛で施している。内面全体が使用により摩滅して表面が平滑になっている。外面は赤褐(10R 5/4)、底面は暗赤灰(10R 3.5/1)で、内面は明赤褐(2.5YR 5/6)～灰褐(7.5YR 4/2)。胎土は灰色で芯の一部は灰褐色。白色粒のほか、黒色粒(溶けている) <1.5mmを含み、5mmの礫も1個見える。

113は、瓦質土器の播鉢。4層下部出土。底部近くの体部片で、櫛目は8+α本。表面は風化と埋没環境による付着物のため調整は不明。色調は内外面が黒灰色、胎土が灰白色で、砂粒(石英・長石・黒色鉱物・火山ガラス) <1mmを少量含む。中世後期の所産とみられる。



図32 滑石製品写真
図30の資料と対応。

以下は、徳之島産の中世須恵器であるカムイヤキ。

114は、カムイヤキの壺の口縁部である。4層下部出土。内外ともに灰(N 4/4)で、断面の芯は灰赤色。胎土に白色粒<0.3mmを多く含み、2mmが1個見える。

115は、カムイヤキとみられる。小壺か。4層出土。外面は平行タタキのちナデ、内面は格子目当て具痕を回転ナデ痕が切る。色調は内外面ともに灰(N 5.5/0)で、断面も灰色である。微細な白色粒<0.3mmを多く含む。

116は、カムイヤキの壺であろう。5層上面(地山直上)出土。外面は平行タタキ目のちナデ、内面は格子目当て具痕のち回転ナデ。色調は外面が暗灰(N 3/0)、内面は灰(N 4/0)。断面の色調は灰色に芯の赤褐色が挟まれる。微細な白色粒<1mmを少量、2mmを稀に含む。

117は、カムイヤキの壺の胴部。4層最下部出土。外面は平行タタキのち横方向のナデ、内面は格子目当て具痕の大半が回転ナデ痕ですり消されている。色調は内外面ともに灰(10Y 5/1)で、断面の色調も灰色である。微細な白色粒<0.5mmを多く含み、<1mmも1個見える。

118は、カムイヤキの壺の胴部下半と思われる。外面は平行タタキのちナデ。内面は格子目当て具痕のちナデ具による沈線状回転ナデ痕。外面は暗青灰(10BG 4/1)、内面は外面よりわずかに赤みがかった暗灰色。胎土は断面が灰赤色で、白色粒<0.5mmを多く含む。

119は、カムイヤキの壺であろう。4層出土。外面は平行タタキ目、内面は格子目当て具痕が残し、内外とも回転ナデ痕がそれらを切る。色調は灰(10Y 5/1)で内面はやや暗い。断面も灰色である。微細な白色粒を含む。

120は、カムイヤキの壺であろう。底部。4層上部出土。外面は、回転ナデの下地にタタキ痕と思われる規則的な痕跡が残し、底面はとくに調整痕は見られない。内面は指頭圧痕のち格子目当て具痕で、最後に回転ナデで仕上げられる。色調は外面が灰(10Y 5/1)、内面が灰(N 4.5/0)。断面の色調も灰色。微細な白色粒<0.3mmを多く含む。

121は、カムイヤキで、壺か甕とみられる胴部片。外面は回転ナデ仕上げで、上半の下地には平行タタキ痕がわずかに見える。内面は格子目当て具痕のち回転ナデ。全体にやや摩滅している。外面は赤黒(7.5YR 2/1)、内面は赤灰(2.5Y 4/1)。胎土は灰赤色だが層状に暗灰色になった箇所がある。白色粒<0.3mmを少量含む。

滑石製品 (図 30 ~ 32)

滑石製石鍋とその再加工品が多い。

122は、1層出土。外形に沿ってあたかも硯の縁のような縁取りを削り出している。表・裏・左側面・上は加工面である。

123は、1層出土。滑石製の石鉢である。大きく欠損するため全形は不明であるが、縦・横に溝を入れている。

124は、4層下部出土の石鍋片。外面に煤が付着する。上面は通常の石鍋口縁部のように放射状の鑿痕があるが、再加工痕の疑いがある。内面左側にも面が生じる。

125は、4層出土。石鍋片で、外面に煤が付着している。下端左辺は人為的に削られたとみられる面である。

126は、2層出土。縦耳タイプの大きな石鍋で、外面に煤が付着している。左下角付近は人為的に削られて面ができていて、上端は一見口縁部のように見えるが、他の欠損面が比較的新しいのに対し、この面は刃物によると思われる二次的な傷がいくつかあり、それがさらになめらかに摩滅している。11世紀頃のものであろう。

陶鍾 (図 33)

127は、陶鍾である。4層出土。長さ44mm、直径25~27mm、孔の径8~9.5mmほどで、重量31.52g(ただし一部欠損)。外面には暗緑色の釉が掛かるが、かなりの部分が剥落している。また軸の残存部はガラスが発泡するなどして凹凸が激しく、これは窯内での変化の可能性が考えられる。釉は、透明度が高く明るい緑青色の部分もごく一部はあるが、大半は暗緑色、さらに一部はやや褐色~黒色を帯びるなどの変異がある。類例が乏しく位置づけに苦慮する資料であるが、4層では近世やそれ以降のものは一切出土しておらず、本層の炭素年代も中世を示しており、中世の所産の可能性は十分考慮されなければならない。ここでは中世と考えておくが、その場合、中世国産陶器または中国陶器ということになる。一方、この1点のみ近世に下る可能性を完全に排除することはできず、層の年代の解釈にも影響を与えるため、今後の調査では留意しておく必要がある。本資料については、今後様々な角度から分析が必要であろう。



図 33 第2地点1トレンチの遺物 陶鍾 (1/2)

近世以降の遺物

土器・陶磁器 (図 34・35)

128 は、近世土師質土器の焙烙の把手部分である。2層出土。上面は長軸方向のナデ、下面は押圧痕。下面には煤が多く付着している。色調は灰白 (10YR 8/2)。胎土に砂粒 (石英・長石) <1mm、細粒の黒色鉱物 <0.5mm を含む。

129 は、近世染付碗。表採。肥前系で、外面は丸窓に斜線、高台内天井部に渦「福」、内面は見込に二重圏線を廻らし、印判による五弁花文を施す。砂高台である。胎土は白色。18世紀頃のものか。

130 は、近世染付碗。2層出土。呉須の絵柄はやや濃く、見込には二重圏線がある。残存部は施軸されているが、外面は光沢がほとんどない。胎土は灰白色。

131 は、近世染付碗。2層出土。外面には松梅文と思われる文様を配し、口縁部内面に雷文を廻らす。軸は無色透明。胎土は白色。19世紀中頃の産物か。

132 は、近世染付小型の鉢で、蓋付鉢か。2層出土。肥前系で18世紀頃のものともみられ、蓋を伴うものと思われる。筒丸形の胴部外面に呉須を施し、絵柄には「壽」「福」字文が配されている。口唇部と高台畳付は無軸。胎土は白色。

133 は、近世染付皿。2層出土。肥前系で、口縁部は輪花。外面は唐草、高台内天井部に渦「福」、内面は菱文を含む手描きの絵柄のほか見込に二重圏線を廻らし印判の五弁花文を施す。胎土は白色。18世紀のものともみられる。

134 は、近世染付蓋で、肥前系。1層出土。外面に「福」「卍」文がある。口縁部内面には四方禪文と二重圏線が施される。軸は光沢がほとんどない。胎土は白色。

135 は、近世染付蓋。2層出土。呉須で、外面に半菊文と花、内面天井部も外面と同様の花を施す。器壁は薄手で軽く、全体に多少の歪みがある。肥前系で、19世紀前半～半ばのものであろう。

136 は、近世染付で、仏飯器の杯部と考えられる。2層出土。外面に呉須で蜻蛉草文が施される。全体に無色透明軸が掛かる。胎土は白色で、小さな空隙がわずかに見られる。肥前系とみられ、18世紀の産物か。

137 は、近世陶器皿の底部。外面にはやや黄色みがかかった灰緑色、NCC0276 (4.6Y 7.5/2.7 染緑) の軸が一部に緑灰色の軸が薄く掛かるが、基本的に露胎である。内面は銅緑軸、NCC0480 (2.7GY 5.8/2.4 ブロー) が掛かる。内面見込は蛇ノ目状の軸掻き取りが施され、そこに重ね焼きの目跡 (胎土目) が4つ残るが、目跡表面は平滑に磨かれている。胎土は明黄灰色である。肥前系で、17

世紀中頃～末にかけてのものであろう。

138 は、近世肥前陶器鉢。1層出土。外面底部付近は回転ヘラケズリ。内面には白の化粧土で蠟による同心円状、波状の刷毛目文を施し、部分的に暗褐色の鉄軸を流し掛けている。外面の上半はやや緑灰色気味の灰軸、下半は露胎でぶい褐 (7.5YR 5/4) を呈する。胎土は灰赤色、高台付近が赤褐色を呈し、白色粒 <0.5mm を少量含む。

139 は、近世肥前陶器鉢鉢。2層出土。17世紀後半とみられる。薄手で、口縁部内面を肥厚する。口縁部は暗緑～暗褐色の鉄軸が施され、その他は露胎。外面には軸の垂れが見られ、内面側は軸が拭き取られたか、やや光沢がある。内面に摺目がある。無軸部外面はオリブ灰 (2.5GY 5.5/1)、内面は灰黄褐 (10YR 4.5/2) を呈する。胎土は赤灰～黒褐色で、肉眼で砂粒はほとんど見えない。

140 は、薩摩焼の土瓶蓋。2層出土。外面上部は回転ヘラケズリで、他は回転ナデ。内面天井部はナデで仕上げている。外面上部に黒い斑の入った褐色の鉄軸を施し、NCC0069 (7.8YR 3.3/4.0 栗皮色)。無軸部は灰赤 (10R 4/2) を呈する。上面に付着物があるが、焼成時に同種の蓋を重ね焼きした痕跡と思われる。胎土は黒灰色で、白色粒 <1mm を含む。

141 は、薩摩焼の壺の下半。2層出土。外面は露胎の底部を除き、赤みを帯びた暗緑色軸、NCC0155 (0.1Y 6.4/11.6 サフラン・イエロー) ～ NCC1267 (3.4YR 2.2/2.0 オータム・ワイン) が掛かり、底面は露胎。内面は暗赤褐色の軸、NCC1173 (8.2YR 2.9/3.2 パージニア・レッド) が全体に薄く掛かる。断面は外面側が黒灰色、内面側が赤褐色であり、胎土に白色粒 <1mm を含む。

142 は、薩摩焼の瓶で、胴部中位以下。2層出土。内外面から残存部底面まで施軸され、外面は暗緑色、NCC1075 (1.6Y 2.2/0.8 黒紫)、内面はやや赤みをもつ NCC1267 (3.4YR 2.2/2.0 オータム・ワイン) である。断面は紫灰色～暗灰色であり、胎土に白色粒 <1mm を微量含む。

143 は、薩摩焼の鉢。1層出土。外面は平行タタキ目のちなデ、内面は格子目当て具痕のち回転ナデ。色調は外面が暗灰 (N 3/0)、内面は灰 (N 4/0)。断面の色調は灰色に芯の赤褐色が挟まれる。外面は褐色系の軸、NCC0065 (3.0YR 3.0/4.9 代赭色) ～ NCC0067 (5.4YR 2.4/2.0 文人茶) が底面を除き掛かっており、内面は灰黄～灰緑色の変異がある。口縁部上面は拭き取りで露出しにぶい赤褐色を呈する。胎土は明褐色で、微細な白色砂礫 <1mm を含み、2mm を稀に含む。

144 は、近世陶器の東燗。薩摩焼であろう。2層出土。



図34 第2地点1トレンチの遺物 近世土器、近世陶磁器 (1/3)



図35 第2地点1トレンチの遺物 近世陶器 (1/3)

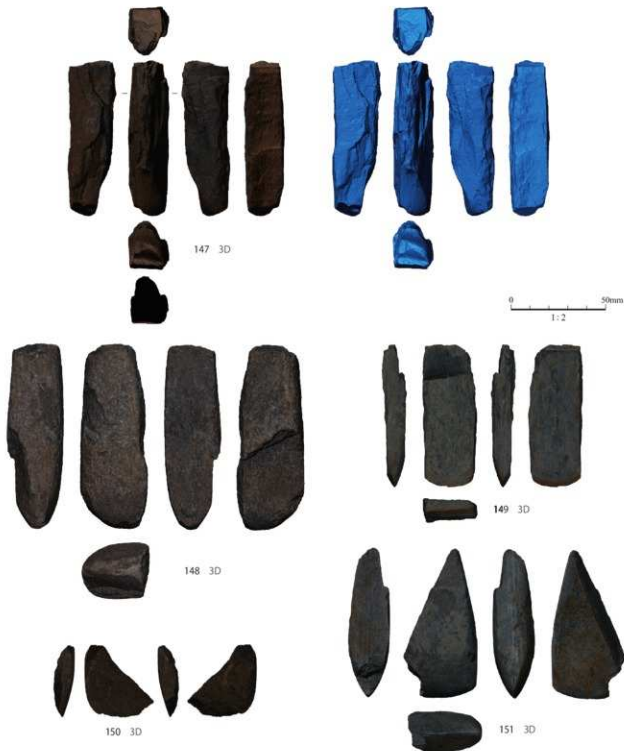


図36 第2地点1トレンチの遺物 縄文時代の石器 (1/2)
三次元計測。

中心に軸孔がある。底面は回転ヘラケズリ。無軸の脚台部を除き、緑みを帯びた褐色の釉、NCC0116 (9.3YR 2.9/3.1 スガー・ブラウン) が施される。無軸部は暗灰黄 (2.5YR 5/2) ～脚台下部で橙 (5YR 7/6)。胎土は灰赤色を呈する。

145 は、琉球無軸陶器壺の口縁部～頸部。表採。口縁

部断面が方形をなし、全体に回転ナデ痕が入る。頸部外面には沈線を施す。頸部内面下部には縦方向で左上がりのナデ痕がある。外面の色調は変異が大きいが全体に暗く、黒褐 (5YR 2/1) ～灰褐 (5YR5/2)、内面は褐灰 (7.5YR 4/1)。胎土は黒灰色で、固く焼き締まっている。

146 は、琉球無軸陶器とみられる播鉢底部。2層出土。



図37 縄文時代の石器写真
図36と対応。

内面は一面に捺目がある。内外面・断面すべて同色で赤褐(10R 5/4)。胎土に白色、黒色粒<0.5mmを少量含む。19世紀か。

縄文時代の石器(図36・37)

縄文時代とみられる石器は、以下のとおりである。後期のものが主体と考えられる。いずれも後世の層から出土したか表採である。

147は、縄文時代後期のノミ形石器の未製品の可能性が考えられる。4層出土。頁岩製か。重量67.00g。

148は、磨製石斧。表採。縦に欠損しており上部もやや新しい欠損である。重量159g(残存)。縄文時代後期か。

149は、扁平磨製石斧。2層最下部で、2層によって4層の面が溝状に切られる落ち際から出土。刃部断面は鋭い。左辺は割削しの状態で擦り痕は見られない。縦に欠損したようにも見えるが、刃部の平面形態は対称である。刃部のリダクションの可能性が考えられるが、この種の石斧では当初からこの幅であった可能性も考えられよう。頁岩製か。縄文時代後期であろう。

150は、磨製石斧の刃部片。3層最下部出土。刃部付近が剥離した状態であるが、遺存面は側面も磨かれている。砂岩製。縄文時代後期か。

151は、磨製石斧。4層出土。小ぶり、全体に研磨が及んでおり、刃部先端も比較的鋭い状態で遺存している。重量72.10g。縄文時代後期か。



以上のほかに、ツールではないが黒曜岩(黒曜石)の剥片が4層より1点出土している。

古銭(図38)

以上のほか第2地点では、中世の宋銭から近代に至る古銭(貨幣)類も発見された。

152は、1銭銅貨幣。15号ピット埋土出土。明治6年制定のいわゆる龍1銭銅貨であるが、製造年表示は現在判読できない。第3地点1トレンチ1層出土のものと同タイプである。

153は、1銭青銅貨幣。1トレンチ1層出土。いわゆる桐1銭銅貨で、昭和12年の製造年表示がある。

154は、寛永通宝(寛永通寶)。1トレンチ15号ピット埋土出土。新寛永の文銭で、17世紀後半の製造であろう。

155は、寛永通宝(寛永通寶)。1トレンチ1層出土。新寛永の文銭で、17世紀後半の製造であろう。

156は、寛永通宝(寛永通寶)。1トレンチ排土。背に「元」字がある「高津銭1」である。1.47g(付着物あり)で、小型である。

157は、寛永通宝(寛永通寶)。2地点表採。新寛永で、17世紀後半～末葉のもの可能性が考えられる。

1 寛保元(1741)年から短期間、摂津国大阪高津新地で製造されたとされる。

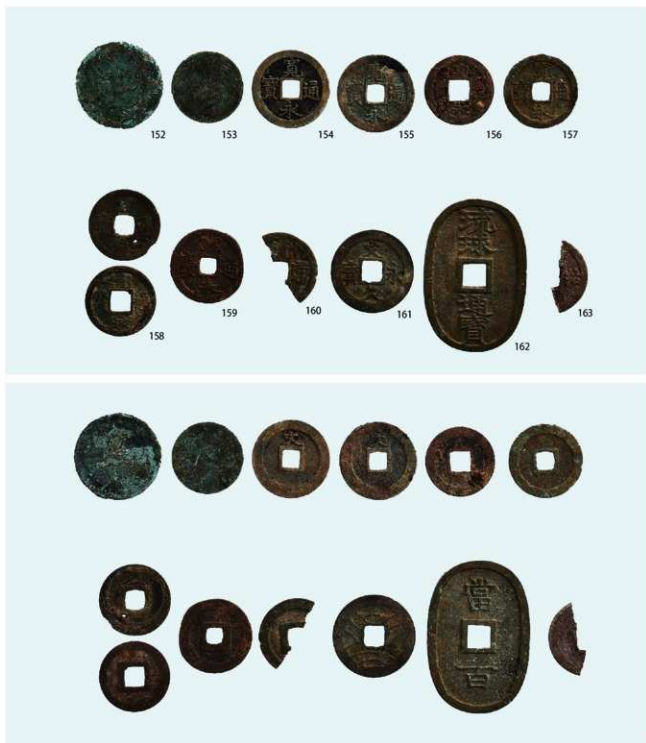


図38 第2地点1トレンチの遺物 古銭類 写真

158は、寛永通宝（寛永通寶）2枚である。1層出土。一緒に出土したもので、錆の状態から2枚がほぼきれいに重なって錆着していた状態が復元できる。A・Bともに新寛永である。

159は、寛永通宝（寛永通寶）。2層出土。古寛永に分類されるものである。右側の円弧がいびつである。

160は、寛永通宝（寛永通寶）。2層出土。半分が割れ

て欠損している。古寛永とみられる。

161は、文久永宝（文久永寶）。2層出土。幕末の銭貨で、文久3（1863）年から慶応3（1867）年までの短期間に鑄造された。背面の「文」が楷書であり、文久永宝のうち「真文」と分類されるものである。

162は、琉球通宝（琉球通寶）。2層出土。19.58gを測る。背面に「當百」の字を鑄出す。薩摩藩が幕末（文久年間）

に琉球・薩摩で通用させたもので、天保通宝(天保銭)を模した地方貨幣として知られる。左右両側面に「サ」字の種印(刻印)がある。

163は、宋銭。2層出土。半分以上を欠失しており、文字は「祐」のみが見える。右に「祐」の字を配する中国銭は宋銭に複数あるが、字体が類似するものとして可能性が高いのは景祐元宝(景祐元寶 北宋1023年発行)か。

近代以降の遺物(図39～42)

近代以降の遺物は、地表、1層(表土)や2層から回収した。高度経済成長期以降の石油化学製品(セルロイド、プラスチック)の玩具などもある程度含まれる。ここでは、それらの遺物のうち昭和前期あるいは中期頃までのものから選別して一部を掲載する。

164は、近代染付碗。2層出土。印判染付で、濃い藍色で竹・花を施す。口縁部内面に輪宝文を廻らす。内面に蛇ノ目状の軸割がある。胎土は白色。

165は、近代染付碗。2層出土。印判染付で、外面は旭日旗を配した図柄で全体を覆っている。口縁部内面に輪宝文を廻らし、見込には圏線と中心に松竹梅文を施す。内面に蛇ノ目状の軸割がある。胎土は白色。

166は、近代染付碗。2層出土。外面は印判により薄緑色で「壽」、打出の小槌、小判、七宝などの宝尽くしの絵柄が施される。胎土は白色。

167は、近現代磁器小碗。2層出土。戦時中の「統制陶磁器」の一種であり、ぐい呑みかもしれない。印判による細線の蛸唐草文と、それに重ねて濃い藍色の細線の若松文が施される。若松文は本資料で残存する1/2周ほどのうち3か所に見られることから、本来90°ごとに4か所施されていたと推定できる。無色透明釉が掛けられ、畳付のみ露胎。高台内天井部に「岐」[291]のエンボスがあり、岐阜県の窯元の製品とみられる。胎土は白色で、小さな空隙がわずかに見られる。

168は、近現代磁器碗。2層出土。戦時中の「統制陶磁器」の一種で、型作りされ、外面に菊と全周に菊花文をもつ磁器碗である。薄い灰緑色の透明釉、NCC0274



図39 第2地点1トレンチの遺物 近代の磁器
明治から戦時中のもの。

(2.0Y 8.2/1.3 薄白茶)が掛けられ、口縁部は淡青色。高台内天井部には型による凸文字で「岐」[270]のエンボスがあり、岐阜県の窯元の製品とみられる。露胎である高台畳付は赤く発色している。胎土は明灰白色。

169は薬瓶。2層出土。青い小型のガラス瓶で、「神薬」の文字のエンボスがある。神薬はかつて万能薬として多数の会社が製造していたが、この個体は、おそらく戦前の富山の置き葉の配置薬とみられる。なお、神薬瓶をめ

ぐっては、住民に記憶の聞き取りをしている」。

170は薬瓶。2層出土。青い小型の八角ガラス瓶で、欠損しているが、「SHISEIDO」を表すエンボス（浮文字）が読み取れる。別の面には「製」が見られ、類例から「資生堂製」、さらに別の面に「神薬」というエンボスがあったことになる。



図40 第2地点1トレンチの遺物 ガラス瓶
「神薬」瓶、目薬瓶。上段は写真、下段は拓本。



図41 第2地点1トレンチの遺物 ビール瓶
「大日本麦酒」ビール瓶。左は写真、右はエンボス部分の拓本。

1 平川ひろみ (2018) 「近現代考古資料としてのガラス瓶と島民の記憶—三島村黒島大里遺跡出土遺物の考古学的記録、オーラル・ヒストリー、アイデンティティの再構築—」『日本情報考古学会講演文集』20

171は目薬瓶。2層出土。無色透明のガラス瓶で、「組合目薬」の文字のエンボスがある。瓶底を指で叩いて点眼する「一口叩き式点眼瓶」で、胴部に3本1単位の斜線が螺旋状にはいり、頂部に桜のマークのエンボスがある。桜のマークには「共存同業」の文字が伴うものがあるとされるが、本資料にはない。太平洋戦争中の製品と思われる。

172はビール瓶。2層出土(出土状況は図18を参照)。褐色の透明瓶で、高さ約289.5mm。大日本麦酒株式会社のものであり、肩部に「TRADE MARK ■」(■はマーク)のエンボスが一周している。底部側面に「DAINIPPON BREWERY CO. LTD.」、底面には星の中心に円と点のあるマークと、その左・右・下に数字と記号からなるエンボスが配されており、瓶の製造元を示すとみられる。昭和前期のものと同定する。

173は、磁器製の汽茶瓶。排土。174も磁器製の汽茶瓶。2層出土。両者とも昭和30年代以前のものであろう。

175は、缶入歯磨。1層出土。遺存状態が良くなく脆弱になっているが、実体顕微鏡でかろうじて判読できた印刷文字の内容から、「塩野義製薬株式会社」が販売した葉緑素入りの半練歯磨きであることがわかる。製品名は「グリーンサンスター」と推定でき、昭和20年代末～30年代のものと推測する。



図42 第2地点1トレンチの遺物 汽茶瓶と缶入歯磨

第2項 第3地点の調査

遺跡北端とみられる畑が第3地点である(図43・44・48)。設定した2か所のトレンチの調査成果を中心に記述する。

第3地点1トレンチ(上段の畑)

上段の畑に設けた1トレンチ(図45・49)では、黄色みを帯びた粘質土が比較的浅いレベルで全体に検出された(図46・49)。一見、本遺跡全体の基盤層とみられる黄褐色粘質土に似ているが、やや湿じりがあるなど不自然な状況がありプライマリーな層とは考えにくかった。そこで、下段の畑との間の崖面などの露頭を検討するとともに、そこに掘り込まれたギンガマ内部の壁面に見られる包含層と、道路を挟んで向かい側にある大里小中学校校門脇の包含層が推定されるレベルなどを再度総合的に検討した。その結果、やはり客土と考えられ、包含層は深いとみられたため、今回は無理をせず、各層の土壌サンプルを採取のうえ、このトレンチの調査を終了した。

1層:表土層。黒褐色を呈する耕作土である。砂礫がやや多く混じっており、トレンチ内の特に南東側に多かった。トレンチのすぐ東側に数十cm高い畑があり、当初は中世の何らかの施設が存在した可能性も視野に入れていたが、聞き取りから周辺の工事の際に砂を置いたため高くなったとのことであった。その砂礫が流れて混じったものと考えられる。1層からは、近世陶磁器の小片や現代のガラス、ビニールなどの小片がごく少量、散発的に出土した。中国系瓦の小片1点も含まれる。



図45 第3地点1トレンチ設定状況(北西から)
清掃後トレンチを設定。



図46 第3地点1トレンチ調査終了時(南東から)
トレンチ床面は、全体が造成時の盛土(客土)とみられた。



図43 第3地点1トレンチ設定前の上段の畑の状況(北西から)
背景は冠岳。畑境の竹の伐採前。下段の畑は左手にある。



図44 第3地点2トレンチ設定前の下段の畑の状況(北西から)
畑境の竹の伐採後。右手が上段の畑。奥が大里小中学校の校門(境の竹の隙間に覗いている)。この畑はかつての通学路であった。



図47 第3地点1トレンチ埋め戻し完了状況(北東から)
原状に復した。

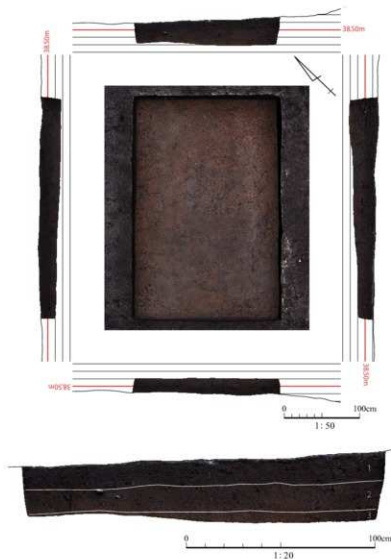


図49 第3地点1トレンチと土層 (1/50、下段1/20)
三次元計測。3層はさらに下に続くと考えられる。

- 2層：黄褐色を基調とし、やや粘性がある。3層に由来するとみられる黄褐色粘質土のブロックが見られるが、全体として3層の上部が耕作により混和・土壌化が進んだものと捉えることも可能である。遺物は小片かつごく少量であり、白磁、青磁、中国陶器、近世陶磁器のほか、近現代の陶磁器類がある。一般的には近現代の層と表現して大過ないと思われる。
- 3層：黄褐色粘質土を基調とし、やや硬い。一見すると基盤層のようなものであるが必ずしも土質が安定せず、黄褐色粘質土に亀裂が見られ、大半は基盤層のブロックからなると推定され、また土壌の不自然な混じりなども見られた。前述のように周辺の露頭などの状況も総合的に判断して、客土と判断した。それを裏付けるように、ごく少量ではあるが3層からも遺物が出土している。細片ではあるが土師

器や陶磁器類が出土しており、2層までとは異なって明らかな近現代のものは含まれていなかった。近世に遡る可能性も考えられる。この層の一部を掘削したところで、本トレンチは調査を中止した。

本地点は、かつて比較的大規模な造成がなされたと推定され、プライマリーな古代・中世の包含層が本トレンチ下の深部に存在する可能性は大であろう。

1トレンチは、調査終了後、埋め戻して原状に復した(図47)。

1トレンチで出土した遺物は少量にとどまった。1層や2層に含まれる現代・近現代遺物も第2地点と比較してかなり僅少であり、ここが耕作地であったことを反映すると思われる。

なお、図等はこちらにはあえて掲載しないが、表土から1銭銅貨幣が出土している。リング状を呈し、一見ハトメ金具のようにも見えるが、サイズやわずかに見える図柄等から明治6年制定のいわゆる龍1銭銅貨とみられ(第2地点1トレンチ出土の図38-152と同じ)、明治16年と推定される製造年表示がある。孔の直径や銅貨の歪み、金属への銃弾の射入・射出口のパターンと合致するとみられる細部形態から、20mm口径弾が貫通した可能性が考えられる。

第3地点2トレンチ(下段の畑)

2トレンチは、第3地点の下段の畑にある2号ギシガマの前庭部分に、ギシガマ開口と連続する形で設けた小トレンチである(図50～56)。ミニトレンチというほどの規模ではあるが、土師器壺、須恵器、土師器椀、縄文土器などが出土している。なお、2号ギシガマが設けられた崖面には、2号の左隣に1号ギシガマがある。

なお、2トレンチの壁面は南北から大きく振れているが、便宜的に北東側を北壁、西北側を西壁とした。

- 1層：耕作土とみられる。黒褐色を呈する。上部は、5層の黄褐色粘質土層に由来するとみられる小ブロックが密である。ギシガマの掘削に伴う構土が混じっている可能性がある。
- 2層：暗黄褐色土。黄褐色粘質土の大きなブロックを含む。土師器、須恵器片などが散発的に出土した。土層の観察から、本層も耕作土の可能性がある。



図 48 第 3 地点の地形とトレンチの配置 (1/200)
 SIMANVIS による三次元計測。

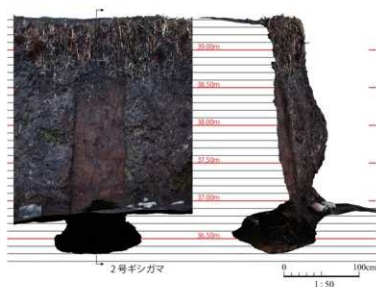


図50 第3地点2トレンチ設定箇所とギシガマ (1/50)
左は法面・ギシガマの正面。右はその断面見通し。

3層：黄褐色～暗黄褐色の粘質土を基調とし、黒褐色～暗褐色土のブロックが多少混じる。炭化材も稀に含まれる。締まった土であるが、本層は造成に伴う盛土である可能性が十分考えられる。もしそうであれば、年代がいつか興味深いところであるが、今のところは不明とせざるをえない。

4層：黒褐色土を基調としつつ、暗黄褐色土ないし焼土が薄い互層状をなしている部分が多く、全体に炭粒・炭化材が目立つ。北東側では比較的単純な層序をなすが、ギシガマ内部の南西方向に向かって極端に厚くなり、ギシガマ内部の上半に見られる黄褐色土も、大きくは本層に含まれると認識した。本層は人為的な造成に伴う可能性を考えているが、ギシガマ内部側では特に焼土や炭化材が多く、ある程度復元可能な土師器甕も見られたことから、少なくともその部分に竈など何らかの遺構がある可能性も十分考えられよう。なお、本層の下、地山(5層上面)が露出した面で調査をやめたが、ギシガマ入口付近のトレンチ南角付近には炭化材を含むシミがあることから、遺構がある可能性もある。4層は土器を含む包含層であり、層は全体的に北東側に傾斜が見られ、トレンチ内の土器片は層の傾きに沿って出土した。また、ごくわずかであるが縄文後期土器片もみられる。出土資料数は少ないが、确实なところとしては、古代末にとどまるものといえる。ただし、小面積であるため本来時期幅があることも想定される。2号ギシガマ内部の壁面に見られた包含層は本層と独立した



図51 第3地点の法面の土層(北東側から)
トレンチ設定前の状況。

遺構等の可能性も残るが、本層に連続している可能性は十分にある。ギシガマ北西壁には土師器甕(図58-176)や、前述の土師器甕(図58-177)の一部が露出していたため、それらも調査し回収した。本層は、道路を挟んで向かい側にある大里小中学校の校門脇にあるとみられる包含層に、本来連続していた可能性が高いと考える。

5層：黄褐色粘質土。基盤層と考えられ硬く締まる。

4層から採取¹⁾した炭化材1点を試料として放射線炭素年代(AMS法)を測定したところ、IntCal13で、1 σ ではCal AD 657～710、746～764を示し、2 σ ではCal AD 648～770を示した(データは末尾の付録2を参照)。型式学的にみても、7～8世紀であることを示す確実な遺物は同層からは出土しておらず、また黒鳥をはじめ三島村全域でもその年代に該当する遺物の存在は知られていないことは注意を要する。顕微鏡による予備的観察では、燃焼によって炭化したものと考えられ、1)炭素年代が示す古い時期の山火事などで焼けた炭化材が含まれたか、2)古代末～中世のものとするれば「古木効果」の可能性が考えられる。この層は古代末を主体かつ下限としながらも、縄文時代後期の遺物を多少とも含んでいることから、1)は蓋然性があろう。しかし、2)も十分考えられ、そうであれば、原生林が周囲に残り樹齢数百年に及ぶ樹木が生育していた環境での木材資源利用の考察や、入植にあたっての開拓などの行為の復元に役立つと

¹⁾ ギシガマ内土師器甕に付着した土壌に含まれていたもの。



図52 第3地点2トレンチ(上から)
トレンチ床面は5層上面、下が北東。



図53 第3地点2トレンチ(南東から)
トレンチ床面は5層上面、その直上、トレンチ壁下部に見えている右に傾いた暗い土層が4層、左の穴はギシガマ。

考えられる。今後留意すべき課題といえる。

なお、2号ギシガマの開口部の上にあたる崖面の一部を清掃し土層を観察した。その結果、崖面には灰褐色を基調とし多少砂礫が混じる粘質土層が数層見られた。高さ約2.7mにも達する崖面であるが、そのほとんどが人為的な造土と考えられ、主体は近世か遅くとも近代の所産と思われる。これらの粘質土層には赤褐色の斑点が散在するが、土壌サンプルの一部を光学顕微鏡で観察したところ、植物珪酸体(プラントオパール)を比較的多く含んでおり、イネ科植物の機動細胞も見られた。今のところ予備的観察にとどまるため推測の域を出ないが、イネとすればこの場所での稲作の存在が明らかとなり、タケやススキなどであればこの地点の環境復元に役立つと考えられる。これも、造成の年代の検討とあわせて今後十分な条件を整えて検討する必要がある。

なお、現代の民俗資料といえるギシガマ自体について

も記録をとることとし、SIM-MVSによる三次元計測を行った(図50・55・56)。

2号ギシガマは、横穴状を呈し、基本的には狭い入口があり奥は膨らむ。全長90cm、開口部の最も手前は幅78cmを測るが、やや奥では幅68cm。内部は最大幅113.5cm、高さ50cmを測る。上部・天井部は造成による盛土の可能性のある3層であり、その下が遺物包含層の4層、下部・底部が5層である。ギシガマの内部は基本的に清掃をした程度にとどめたが、開口部付近の壁面や底面には多少の被熱痕とみられる赤変部があり、炭や焼土も見られた。聞き取りでは、ギシガマを掘ったときには中で火を焚くとのことである。

第3地点2トレンチは、調査終了後、埋め戻して原状に復した(図25)。

第3地点は、造成による客土が上段の畑で著しいと判断された。本地点では、第1・第2地点と比較して中国陶磁器や瓦よりも土師器甕や土師器椀などのほうが多く、中世を遡る時期から遺跡が形成されたといえる。

第3地点2トレンチの遺物

2トレンチ、およびその連続といえる2号ギシガマ壁面からは、極めて小面積の調査の割には一定量の遺物が出土した(図58・59)。

176は、土師器椀、2号ギシガマ壁面、4層出土。体部は口縁部に向けて斜めに直線的に立ち上がり、開いた高めの高台をもつ。内面は部分的に黒斑がある。他にはぶい黄緑(10YR7/3)を中心にやや灰色気味の部分、橙色気味の部分など変異がある。残存率1/2ほどの個体である。胎土に砂礫(石英・長石・黒色鉱物)<2mmを多く含み、石英が卓越する。4mmの礫が1個見える。やや軟質である。

177は、土師器甕、2号ギシガマ壁面、4層出土。底部は丸底で、屈曲気味に立ち上がり胴部となる。内面を削っているが器壁が非常に厚い。底部を中心に接合してきたが、口縁部を欠いている。破片の周囲が脆弱な傾向があり、特に胴部上位の接合面で著しい。底部は火熱で赤変し、胴部には薄く煤が付着している。内面は炭素で底部付近が黒変している。それらの変化をさほど受けていないとみられる部位の色調は、ぶい赤褐(2.5YR 4/4)を基調とする。外面の調整はナデであるが、屈曲部より上には強いコピナデかと思われる縦を基調とする浅い凹線状の皺がある。内面はケズリである。胎土は砂礫<2.5mmを多く含み、石英が非常に多く、長石、ごく少量の黒色鉱物を含む。

178は、須臾器甕の胴部である。2号ギシガマ床面埋

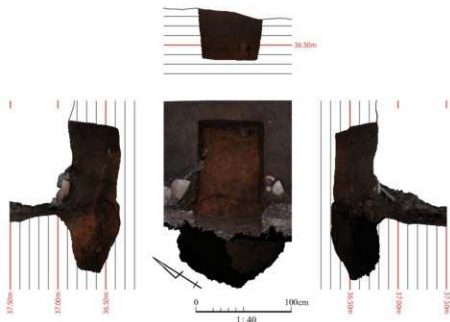


図54 第3地点2 トレンチと土層 (1/40)
三次元計測。

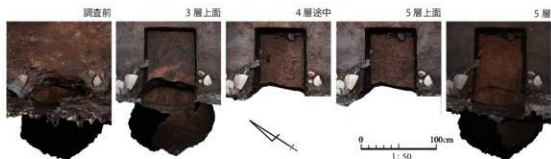


図55 第3地点2 トレンチの調査進行過程の三次元記録 (1/50)
調査過程の各段階を記録した。なお、掘り下げ過程で戦ね層の変わり目などの可能性があると認識したところで記録したため、最終的な土層とは一致しないところがある。

積土（現代）出土。ギシガマ掘削時の土の可能性が高いと思われ、4層に由来するものであろう。外面はタタキによる細かな格子目、内面は平行当て具痕がある。外面は灰褐（SYR 5/2）、部分的に褐灰（SYR 4/1）で、一部の格子目にごく薄い自然軸が見られる。内面は褐灰（SYR 5/1）。断面はにぶい橙色で、やや軟質である。胎土に白色粒<0.5mmを少量含む。

以上が古代に遡ると考えられる資料である。中世遺物は以下がある。

179 は、白磁の合子蓋であろう。上段の畑と下段の畑の間・法面清掃時表採。外面は型による文様があり、内面は一部に隆線が見られる。釉は内外面に薄く掛かっており、やや黄みを帯び NCC0178 (9.7YR 8.0/1.4 アイボリー) で、透明度は高い。胎土は白色。

180 は、白磁皿の底部とみられる。IX 類か。上段の畑と下段の畑の間・法面清掃時表採。平底・薄手で、底

面は露胎。釉は NCC0274 (2.0Y 8.2/1.3 薄白茶) で薄く掛かる。胎土は白色。

181 は、中国陶器の底部で、耳壺とみられる。2号ギシガマ周辺表採。外面は全体に回転ヘラケズリで、底面内部は周囲に回転ヘラケズリによる段が残る。内外面に NCC0323 (1.6Y 7.2/1.9 砂色) ~ NCC0131 (6.9YR 7.0/2.1 ベージュ) の釉が薄く掛かる。下端付近は内外面ともに露胎で、外面側は浅黄橙 (10YR 8/3)、内面側は橙 (SYR 7/6) を呈する。胎土は褐灰色粒<4mmと白色粒<1mmを少量含む。断面は施釉部の芯が灰色、無釉部は黄橙色。

182 は、滑石製石鍋再加工作品。表採。外面に規則的な鑿痕と一部に煤の付着があり、内面は全体に煤で黒変しているため、元来は石鍋として使用されたものである。図の左側面は直線的で、刃物による切断痕がある。石鍋片の内外両面から刃先で切り込みを入れ、甲き割って分割したものであろう。内面側は切断痕から数 mm 離れ

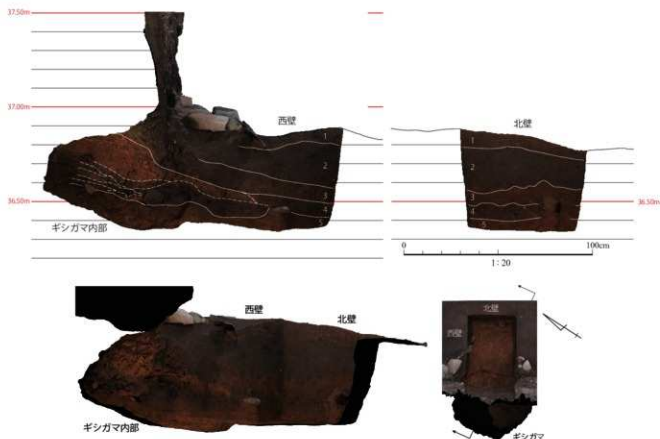


図56 第3地点2トレンチの土層 (1/20)
三次元計測。下段の図は、西壁と北壁のつながりを示す。



図57 第3地点2トレンチ埋戻し完了状況 (北東から)
原状に復した。

て平行する線が刻まれており、一種のケガキ線といえるかもしれない。その外面側には側縁から大小の弧状の線が1本ずつ出しており、手のぶれを示す可能性も考えられる。内面側の上端3mmほどにも横線があり、上端と平行、切断痕と概ね直角であるが、上端に切断痕は見えない。

以下は縄文時代の資料である。

183は、縄文時代後期の市来様式の深鉢。表採。口縁部下部から胴部への移行部分。内外に横方向を基調とする二枚貝条痕を施す。外面は橙 (5YR 6/8)、内面はにぶい橙 (5YR 6/4)。砂礫 (石英・長石・雲母) <1mm を含む。

諸特徴からみて市来式であろう。

184は、縄文時代後期の市来様式深鉢。第3地点表採。小振りの個体の口縁頂部で、口縁部文様帯には上・下それぞれに密な爪形連続刺突文、中段には幅広の凹線が1本配されるのみである。中段は、複数の凹線文など典型的な文様が省略されたと捉えることができる。文様帯の角 (頂部下) には横位の刻みが施され、両脇は深めの爪形刺突があるが、これも同様の省略といえる。内面には横位の爪形刺突が3個施される。外面の頸部以下は横方向のケズリ状のナデ。内面は、文様帯裏が二枚貝による貝殻条痕のちナデとみられ、胴部は横方向の貝殻条痕。色調はにぶい橙 (5YR 7/4) ～にぶい黄橙 (10YR 6.5/3)。胎土に砂粒 (石英・長石・雲母) <2mm を多く含む。

185は、縄文時代後期の市来様式深鉢。2トレンチ周辺表採。市来式の口縁部で、口縁部文様帯は横方向のナデのち二枚貝の腹縁による刺突文、その下端に爪形の密な連続刺突文を施す。文様帯より下はナデ、内面は横方向の貝殻条痕。色調は橙 (2.5YR 6/6) で、黒斑がある。胎土に砂粒 (石英・長石・雲母) <1.5mm を多く含む。胎土中に堅果類の殻かと思われる包埋圧痕がある。

186は、縄文時代後期の市来様式深鉢。2トレンチ周辺表採。市来式の口縁部で、口縁部文様帯は下部しか遺

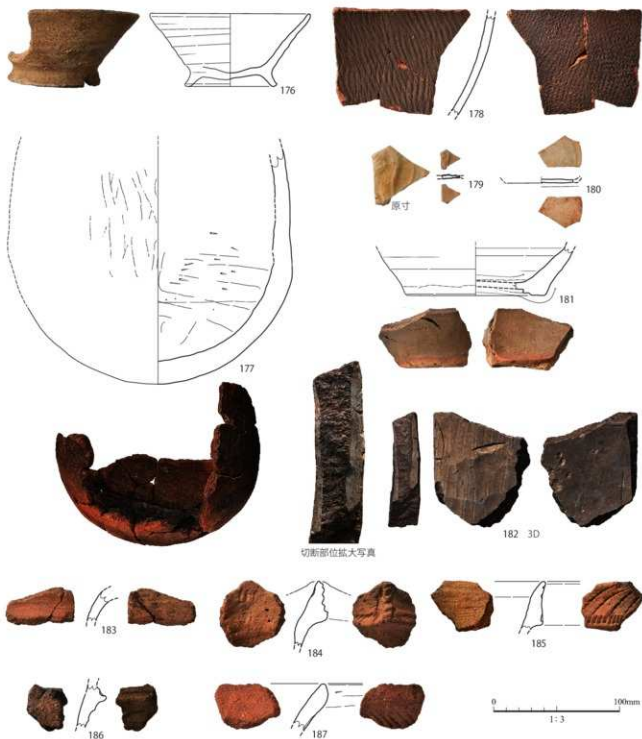


図58 第3地点2トレンチ出土・周辺採集遺物 (1/3)

存しないが、凹線と爪形の密な連続刺突文が見え、典型的な文様構成とみられる。頸部の下にも文様があり、凹線とそれを切る爪形刺突の一部が見える。摩滅のため外面の調整は不明瞭。内面は工具によるナデ様の擦過とみられるが、やはり摩滅のため不明瞭。色調はにぶい橙(7.5YR 7/3)で、外面頸部より下と内面は使用によりやや黒変している。胎土に砂粒(石英・長石・微量の黒色

鉱物・火山ガラス) <1mm を多く含む。

187 は、縄文時代後期の深鉢。2号ギシガマ埋土出土。口縁部片で、ゆるく肥厚した口縁部の下に斜めの連続刺突を施す。二枚貝によるものと思われる。外面は砂粒が動く程度のヨコナデが施されており、口縁端部は横方向に貝殻でいったん擦過した可能性がある。内面は横方向の貝殻条痕が施される。外面は煤が一部に薄く附着して



図59 第3地点の遺物(1/3)
三次元計測。磨石・敲石。下段は3Dデータをもとに曲率表示させたもの。

おり暗い色調であるが、その影響が少ない口唇部～内面は橙(SYR 6/6)。礫(花崗岩片)<5mmを微量、砂粒(石英・長石・雲母)<2mmを含む。広義の市来様式に包括される可能性があり、やや後出するものと思われる。

188は、磨石・敲石である。2トレンチ周辺表採。平面形はほぼ円形を呈する。両面ともに表面は平滑で、磨石として使用されたとみられ、側面の全周に敲打痕が顕著で、敲石としても使用されたとみられる。安山岩製。103.7mm × 100.3mm × 54.9mm、重量 833g。

以上のうち中世を遡り10世紀以前とみられる資料と

して土師器類を含む包含層があったことは重要である。(須恵器裏もそうであろう)縄文時代の後に長く無人島状態であったとする我々の所見が正しければ、その後の人の営みを確実に認定できるものとしては、今のところ最も古い段階といえる。本遺跡で概ねその時期に該当するものは土師器杯・椀と裏であり、須恵器にも並行するものが多く含まれるとみられる。その視点で改めて黒島の遺物を眺めると、それら「古代末」の資料は、本遺跡のほか、黒島平家城遺跡などでも確認でき、黒島で再び遺跡の形成が開始される年代を示す可能性がある。

第3章 調査の成果と課題

第1節 成果と課題

大里遺跡の発掘調査としては、平成26年度に続き今回で2回目となった。この調査について以下にまとめるとともに、若干の考察と課題の提示を行う。

1. 調査区には中世の良好な層や遺構が存在することが期待されたが、調査の結果、後世の造成による盛土などのために包含層の一部と若干のピットを検出した程度にとどまった。平成26年度調査の第1地点では11世紀から14～15世紀に及ぶ中世の幅広い時期の多様な遺物が出土し、特に11～12世紀の最下層では中国系瓦が多く出土した。今回の調査では、第2地点の最下層(4層)で、中世前期の遺物もあるが主体は14～15世紀と判断された。また、第3地点では包含層の存在が確認され、中世初期を遡る「古代末」の可能性のある包含層の存在が確認された。以前から知られていた校門脇の遺物出土地点に包含層が連続する可能性があり、その実態を知らずとも推測する手がかりが得られたことになる。

2. 前回同様、弥生時代初頭から平安前期の長期にわたる時期に明確に該当する遺物は発見されず、その期間、基本的な居住はなかったとすることこれまでの所見が維持されることになった。上記の第3地点の資料は、縄文時代を除けば黒島で今のところ最古段階であり、現在の集落の基本を形成する最初の定住・開拓の時期を考えるうえで注目できる。黒島が多量の中国製品などで生活を呈し始めるとみられるのは11世紀後半から12世紀であるが、その時点で本遺跡で居住が開始されたのではなく、やや遡る時期からであったことになる。縄文時代から後の長期のブランクを経た黒島への再居住の開始の時期をさらに明確にすること、その契機の解明が今後の課題の一つとなる。

3. 第2地点は、前回調査の第1地点とわずか40mほどしか離れていないが、現状では段差があり第2地点のほうが低い。もともとは緩傾斜地であったとみられるが、第2地点ではかなり傾斜が緩いことに加え、中世前期の包含層を欠き、地山に直接中世後期の包含層がのることから、14～15世紀かその直前に人為的に削平を受けた可能性が十分考えられる。そうであれば、現在、集落で見られる階段状の土地の形成は少なくとも

も中世まで遡る可能性が出てくる。おそらく大里遺跡のほぼ全域で近代までに人為的な地形変化(造成)が幾度も行われたと推測でき、第3地点のように厚い盛土で形成された場所もある。中世あるいはそれに先立つ古代の定住以降、造成が繰り返され、現在の集落景観が形成されたというのが最も蓋然性の高い仮説といえよう。今後はこの点に注意して検証する必要がある。

4. 鬼界カルデラが近いため、約7,300年前の巨大噴火による影響があったと推定され、その実相に考古学的に迫ることも課題である。黒島では噴火直前の縄文時代早期の土器や、それを遡る草創期の遺物が過去に発見されており、遺跡土壌のテフラ分析、あるいは植物珪酸体分析などを進めることも重要であろう。また、縄文時代後期の遺物は今回の調査でも散見され、石器を中心に島の各所で発見されているが、本来の所属層は今回も発見できなかった。なお、縄文時代後期土器は、大きく分けて花崗岩由来の鉱物を含み屋久島か大隅半島産とみられるものと、薩摩半島産とみられるものがある。黒島で土器製作が行われたかどうかは、当時どのような島嶼利用がなされたかを知る手がかりとなると考えられ、蛍光X線分析などによる調査を進めたい。

5. 発掘の記録には三次元(3D)計測を多用し、詳細かつ精密な記録をとることができた。前回の第1次調査やそれ以前の黒島平家城の調査でも一部で用いたが、今回は本格的に実施した。三次元計測を調査の最初から最後まで徹底に行う傾向は海外で見られ普及しつつあるが、国内の調査では稀有である。このことは本遺跡の価値を高めるのにも寄与すると思われる。なお、三次元計測による記録は、考古学的記録や研究材料として優れていることはもちろん、遺跡レプリカの作成、VR(バーチャルリアリティ)等による調査の追体験、過去の景観の復元など様々な応用が可能であり、社会教育・学校教育を含む将来への活用が可能になる。

6. 第2地点、第3地点ともに中国系瓦は小片がみられるが、前回調査の第1地点の1・2トレンチの濃密な状況と比較すると、より希薄である。主体となる時期の差を考慮するとしても、第1地点付近が瓦の分布中心である可能性が高まってきたと考える。とはいえ、小片を含めれば広範囲に分布しており、これが造成等によって本来の位置から移動したのかどうかは今後の調査を待つべきである。

第2節 普及・教育

調査に伴って得られた直接的な成果に加え、以下のような面でも一定の成果が得られたので、ここに記録しておきたい。

本遺跡は中世遺跡としてユニークな存在であり、住民への理解の浸透は、社会教育の意味でも、地域へのアイデンティティの促進や誇りの醸成の意味でも重要であろう。調査中には、これまでの方針と同様、住民の記憶に残る「新しい過去」に関する情報も得られるよう配慮し、相互の会話や聞き取りを重視するとともに、調査現場をできるだけオープンにするよう努めた。その結果、住民どうしが発掘現場の状況を見たり現場で会話したりするなどして、かつての道路跡、地形など様々なことを懐かしく想起することにも役立った。それらを通じて、高齢者と若者との間で世代を超えた会話が顕著に促進されるなど、印象深い場面が多く見られた。

なお、今年2021年の三島村カレンダーの表紙には、本遺跡出土の神楽ガラス瓶の写真を採用していた。小さなガラス瓶ではあるが、ほとんど忘れ去られていた過去の出来事を想起し、大切な記憶を若者に伝える



図60 現地説明会の様子①

上：調査地点の周辺にある天照大神・創龍大神前での遺跡の概要説明。
下：大里遺跡内の主要な箇所を巡りながら見学・説明するミニ「遺跡ツアー」。



図61 現地説明会の様子②

上：三島村役場大里出張所前で現地説明会資料を配布し遺跡全体の概要説明、中2段：第2地点トレンチ周辺での調査成果の説明、下：現場での各種出土資料と、以前出土した資料の3Dレプリカを用いたミニ展示と解説。



図 62 中学生による見学と発掘体験
上：対話と解説。多くの質問を受けた。中・下：発掘体験の様子。



図 63 大里小中学校全校集会での講演と展示解説
上：全校集会での講演。他：大里小中学校保管資料と本遺跡出土資料の解説と対話。

きっかけとなった資料でもあり、世代を超えた伝承の大切さを表す象徴的な資料ともいえる。黒島で発見される目をみはるような考古学的資料だけでなく、住民の思い出のよすがとしても貴重なものとなった。今後とも三島にふさわしい、さらなる活動ができればと考えている。

11月に実施した第2次調査の現地説明会では、大里・片泊両地区から40人の参加があった(図60・61)。これは人口に照らせば少なくない人数であり、関心の高さがうかがえる。

調査中には、大里校の中学生が社会科の先生の引率で学年ごとに発掘現場の見学を訪れ、短時間ながら発掘体験をした(図62)。都合、同校の中学生全員が参加したことになり、なかには生徒の希望で2回参加してくれた学年もあった。調査後には生徒たちからのお礼状が届き、子どもたちの興奮が文章で伝えられずもどかしい、どの先生の言葉が添えてあった。何がしかの刺激となったとすれば嬉しいことである。また、校長先生の勧めにより大里小中学校の全校集会でもミニ講演と展示解説を行うことができた(図63)。

なお、以前の黒島平家城遺跡の調査のときには、片泊校の中学生が発掘体験に訪れてくれた。今回も片泊小中学校から発掘の見学が予定されていたが、当日悪天候となってしまったため中止となったことは残念なことであった。しかし、改めて実施した現地説明会には同校の先生の引率で生徒が参加してくれた。

あとがき

多くの方々の支援を受けて一連の調査を無事に遂行することができ、ここに報告書が刊行できることになった。未解明の諸点を含めて今後の課題は多く、調査研究を継続・展開する必要がある。

ともあれ、調査と整理作業について、これまでの様々な記憶がよみがえってきて感慨深い。三島・黒島ではできるだけ新しい方法を開発しながら調査研究をすることを常々念頭に置いてきたが、今回の現場では以前に増して三次元計測を多用することなど新たな試みを行うことができた。本報告書もそれを反映したのとなっている。幸い、近年は学界でも三島村の知名度が高くなってきたと感じるようになった。考古学的な成果はもちろんであるが、今度は三島で何が行われるのかといった注目のされ方はありがたく、一方で責任も痛感するところである。

三島村での活動をするようになって、これまでの調査で幾度も台風に遭遇してきたが、今回の調査中は台風直撃のため、住民の方々とともに避難所で1泊一緒に過ごすことになった。避難中も様々なことを住民の皆さんからご教示いただいたが、一方で抗いがたい自然の猛威の中で、人間は自然環境とどのような関係をもっていくべきかということも考える機会となった。人類がたどった過去の歴史の中にそのヒントがあることは疑いなく、ジオパーク関連事業としても自然・環境・文化の総体としてこの黒島、三島村をとらえていくべきことを改めて感じ、また大学でも議論したしだいである。

日高康雄氏とサユ子氏ご夫妻には、発掘調査にあたり終始様々なご配慮とご協力をいただいた。大里地区区長の日高重行氏をはじめ大里地区の方々には大変お世話になった。とくに村文化財審議委員の日高覚氏には諸般の助けをいただいた。日高武二氏には採集遺物等についてご教示いただいた。激励とご援助をいただいた片泊地区の山田和広氏、大里小中学校・片泊小中学校(当時)をはじめとする教育関係の方々に感謝申し上げます。また、調査中に差し入れを下さった方も多くおられる。芳名を記せなかったが、多くの方々のご理解とご援助がなければ調査は遂行できなかった。

また、定住促進課、教育委員会をはじめとする三島村役場には諸般の条件を整えていただいた。鹿児島国際大学産学官地域連携センターには調査に関する事務を行っていただいた。整理作業では特に大きな頑張りを見せた大学院修了生の若松花帆さんも忘れることはできない。

末尾ながら関係者一同、深く感謝いたします。

Calibration of Radiocarbon Age to Calendar Years

(High Probability Density Range Method (HPD): INTCAL13)

(Variables: $d13C = -26.2$ ‰)

Laboratory number **Beta-487152**

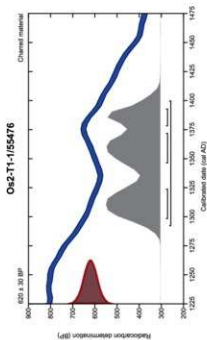
Conventional radiocarbon age **620 ± 30 BP**

95.4% probability

(95.4%) 1292 - 1400 cal AD (856 - 550 cal BP)

68.2% probability

(26.6%) 1298 - 1324 cal AD (852 - 626 cal BP)
 (26.5%) 1346 - 1372 cal AD (804 - 578 cal BP)
 (15%) 1378 - 1393 cal AD (572 - 557 cal BP)



Database used
INTCAL13

References

Stuiver, M., & Reimer, P. M. (2005). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
 Reimer, P. M., & Stuiver, M. (2008). Radiocarbon calibration. *Radiocarbon*, 50(1), 161-172.
 Reimer, P. M., et al. (2013). Radiocarbon 2012a.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

付録1 第2地点1トレンチ4層下部上面検出炭化材の放射性炭素年代測定結果
 (AMS法、IntCal13)

Calibration of Radiocarbon Age to Calendar Years

(High Probability Density Range Method (HPD): INTCAL13)

(Variables: $d13C = -28.0$ ‰)

Laboratory number **Beta-487153**

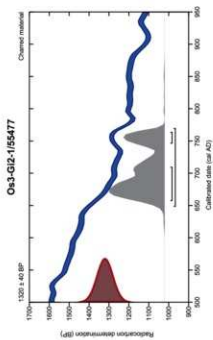
Conventional radiocarbon age **1320 ± 40 BP**

95.4% probability

(95.4%) 648 - 770 cal AD (1302 - 1180 cal BP)

68.2% probability

(52.3%) 657 - 710 cal AD (1203 - 1240 cal BP)
 (15.9%) 746 - 764 cal AD (1204 - 1186 cal BP)



Database used
INTCAL13

References

Stuiver, M., & Reimer, P. M. (2005). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
 Reimer, P. M., & Stuiver, M. (2008). Radiocarbon calibration. *Radiocarbon*, 50(1), 161-172.
 Reimer, P. M., et al. (2013). Radiocarbon 2012a.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

付録2 第3地点キシガマ層面包含層検出炭化材の放射性炭素年代測定結果
 (AMS法、IntCal13)

大里遺跡発掘調査 現地説明会資料

平成20年11月18日 於 大里出張所前 11:00～12:00

黒島は遺跡の名所です。そのなかでも特に重要な遺跡の一つが大里遺跡です。このたび2次発掘調査をおこなったので、これまでの調査成果と合わせて、その成果をご覧ください。私からは8年前から黒島で調査をし、黒島の歴史を解明しようとして努力してきました。多くの遺跡を発見しましたが、発掘したのは片石の黒島平城遺跡と、この大里遺跡です。

調査の概要と成果

大里遺跡の中心の時期は、①縄文時代後期(約4000年前)から晩期(約3500年前)と、②中世初期の平安時代の後半ごろから、鎌倉時代(約800～1000年前)、③そして、それから現代までです。平安時代から現代まで、途切れたことなく集落が営まれたと考えられます。大里集落とその周辺では、地域の方々が多くの資料を発見されており、大里小学校に保管されています。私たちの表面調査を取りでも重要な遺跡であることを確認し、三島村重要遺跡分布調査事業の一環として発掘調査をおこないました。とくに天照大神、伊弉大神から大里小学校の校門にかけては、中国産の高麗磁器や陶土器などと一緒には、日本では非常に珍しい中国の瓦が分布することがわかりました。そこで、中国瓦が多いところを発掘しました。

1次発掘 加藤大神の南内、南側の芝田内を築きました(第1地点)。平安時代の終わりごろ～鎌倉時代初期の、中国からの輸入磁器や陶土器などが多く出土し、中国瓦も多く出土しました。この時期では、朝鮮半島の高麗無釉磁器、徳高産のカムイキ(伊豆東部産磁器)、長崎産の滑石製土器、南西諸島の滑石製土器なども出土しました。海を越えて遠く各地のものも出土していることが注目されます。その他の時期では、縄文時代の土器片、礫石、炭(木の葉などをすりつぶす道具)などの石器も出土しました。また、中世入り時代、あるいは明治時代の遺物も出土しています。最下層から中国瓦が集中する層や、建物の柱穴も見つかりました。

2次発掘 大里遺跡南側の花畑内(大里小学校のすぐ上)を発掘しました(第2地点)。「政」（た）と呼ばれる場所が、政治的な中心であった可能性が考えられます。1次調査より出土品は少ないですが、やはり同時期の多種多様な種類のものも出土しました。ただし、中国瓦出土量はやや少なく、加藤大神周辺のものもかなりの割合が出てきました。当時のものとしては中国の宋銭とみられるものも出土しました。また、1次調査よりやや新しい中世後期(鎌倉～室町時代)の遺物も数多く見られました。また、1次調査(掘りおぼり)も出土しています。縄文時代の石斧も出土しました。江戸時代の陶磁器や明治時代以降のものも多く見つけられました。

この地点はもと小学校側へ移るよう傾斜していたらしく、中世以来、段々で築かれた平坦にされたこともわかりました。整地が繰り返されて今のような集落の景観になったようです。大里小学校の校門の南の畑も調査しました(第3地点)。整地層が厚く、やはり平地を伴

るために多くの土器が運び込まれたことがわかりました。やはり縄文時代後期、中世の中国産陶磁器、陶土器などが出土しました。道筋(街道)が通る前は学校の校門までの道があった場所にあかたります。現代のギンガマ(字の野蔵次)の三次元計測などのも行いました。

調査の特徴

発掘の記録には、三次元(3D)計測を用いました。そのため、非常に詳細な記録ができました。これらで3D計測をした遺跡はありますが、調査の一部にとどまっています。最初から最終まで徹底的におこなったのは日本では珍しいことです。出土品の3D計測もしています。

世界の中の黒島

出土した中国磁器の種類は、日本最大の国際貿易港だった長崎(長崎)と非常に似ています。博多との強いつながりがあります。また、国内で中国瓦が出土するのは、博多の周辺と瀬戸半島の瀬川流域の遺跡、そして黒島、破笠島だけです。とくに博多以外で大里遺跡は最も中国瓦が豊富に発見されます。これらの成分を分析したところ(透光X線分析)、すべての地域の中国瓦は中国産の国際貿易港・寧波で生産され輸入されたことがわかりました。どんな発物にも書かされていない瓦の輸入が判明したことは、発掘で調べることが大事であることを物語ります。また、日本貿易の実態を知るうえで、重要な発見となりました。

おわりに

黒島には大変長い時間を経て残ったものが、地上にも地下にもたくさんあります。それらは先祖がその黒島で力強く生きてきた証です。世界の人々を感じさせるような歴史を解き明かす手がかりにもなります。しかし、いちど忘れられると取りもどけません。黒島の大切な文化に多くの方が関心をもっていただければ、と願っています。

これから大学で出土資料の整理と研究をおこないます。今後にご期待ください！

お助け 黒島で一番古い遺跡は？

アノコト氏で日高行氏により発見された瓦・ミ形石斧が、黒島で最古のものです。縄文時代早期(約13,000年前)です。縄文時代の石斧としては非常に珍しいです。大変貴重な資料です。

また、土器としては縄文時代前期の磨石・押土器がいまのところ最古です(大里小学校保管資料)。約7,500年前のものですが、黒島カスガラの遺跡からはほぼ直前にあたる資料です。こうした大変古い時代の人の活動のあとが、黒島には残っています。黒島は昔ながらの村から人がいた集落のある貴重な島でもあります。

作成 鹿児島大学考古学研究室(中国磁器室)

- この調査は三島村と鹿児島国際大学の連携協定に基づき実施されたものです。
- 調査、作成にたたり、三島村主任佐藤、三島村教育委員の多大な協力を得ました。
- 黒島の方々には調査中、ご理解と多大なご協力、ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	みしまむらくろしまおおさといせき 2					
書名	三島村黒島大里遺跡 2					
副書名	平成 29 年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査に係る大里遺跡第 2 次発掘調査					
巻次	1					
シリーズ名	三島村埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	2					
編著者名	(責任編著) 中国聡 (著者) 中国聡 平川ひろみ 太郎良真紀 下小牧潤					
発行機関	三島村 鹿兒島国際大学考古学研究室 (中国聡研究室)					
所在地	〒 892-0821 鹿兒島市名山町 12 番 18 号 〒 891-0197 鹿兒島県鹿兒島市坂之上 8 丁目 34 番 1 号					
発行年月日	令和 3 年 3 月 31 日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大里遺跡	鹿兒島県鹿兒島郡三島村大字黒島字下村 35 番地、字北下村 3 番地	30° 50' 07"	129° 57' 23"	2017.9.3 ~ 9.29	18.1㎡	学術調査 (三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
大里遺跡	散布地	古代～中世	包含層 ビット	白磁、青磁、中国陶器、中国系瓦、滑石製石鏽再加工作品、土師器、須恵器、近世陶磁器、縄文土器、磨製石斧		三次元計測を多用した調査

表紙

白磁碗の内側に施されたスタンプによる草花の文様 (本書掲載番号 15)

裏表紙

1 トレンチ出土の神楽ガラス瓶 (本書掲載番号 169)

三島村埋蔵文化財調査報告書 第 2 集

三島村黒島 大里遺跡 2

平成 29 年度三島村・鬼界カルデラジオパーク黒島関連調査に係る
大里遺跡第 2 次発掘調査

中国聡 編

2021 年 3 月 31 日

三島村

鹿兒島県鹿兒島市名山町 12 番 18 号

鹿兒島国際大学考古学研究室 (中国聡研究室)

鹿兒島県鹿兒島市坂之上 8 丁目 34 番 1 号

